

研究展望(平成21年)

IKAI, Takamitsu / 江口, 文恵 / 宮本, 圭造 / 高橋, 悠介 /
表, きよし / 小林, 健二 / 山中, 玲子 / 中司, 由起子 / 伊
海, 孝充 / 竹内, 晶子 / EGUCHI, Fumie / MIYAMOTO, Keizo /
TAKAHASHI, Yūsuke / OMOTE, Kiyoshi / KOBAYASHI, Kenji /
YAMANAKA, Reiko / NAKATSUKA, Yukiko / TAKEUCHI, Akiko

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of
Nogaku Studies

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

192

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008826>

研究展望 (平成二十一年)

平成二十一年に発表された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に掲載された論文を概観する。前年分と同様、単行本(江口文恵)、資料研究(宮本圭造)、能楽論研究(高橋悠介)、能楽史研究(表きよし・小林健二)、作品研究(山中玲子・中司由起子)、狂言研究(伊海孝充)、外国語による能楽研究(竹内晶子)の七つに分けて分担執筆している。重要な論考を見落とすなどの遺漏も少なからずあると思う。ご寛恕を乞う。

【単行本】

『狂言鳳の会公演五十回記念誌「鳳」(鳳の会編。B5判変型232頁。1月。鳳の会)

名古屋を拠点に活動する狂言和泉流、狂言共同社の会「鳳の会」五十回を記念して編纂された冊子。発足した平成四年八月から同二十一年一月までに発行された会報とパンフレットを再録したもの。巻頭には会での舞台写真カラー八枚と小林貞による序文を掲載。巻末には「鳳の会 五十回のあゆみ」として、全公演の一覧表と曲目索引を掲げ、十八年におよぶ会の歴史を総括する。

『うつぼ舟Ⅱ 観阿弥と正成』(梅原猛著。四六判381頁。1月。角川学芸出版。二二〇〇円)

前年刊行の『うつぼ舟Ⅰ 翁と河勝』に続く書。観阿弥が楠正成の甥であるという説の発端でもある「上嶋家系図」を再評価する。学界では否定的な見解が大勢を占める、大和猿楽親世座のルーツを伊賀とする説を再度提唱し、独自の論を展開する。78頁の「私は全面的に表氏に論争を仕掛けたいと思う」は、翌年の表章「昭和の創作「伊賀親世系譜」梅原猛の挑発に応えて」(べりかん社)刊行のきっかけとなった。

『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』(横道万里雄・山中玲子・松本雍著。A5判245頁。1月。檜書店。二六〇〇円)

能の特殊演出である小書に焦点をあてた書。三部に分かれており、「Ⅰ 小書の諸相」(横道)、「Ⅱ 小書の成立と歴史」(山中)、「Ⅲ 能の現行小書」(松本)からなる。Ⅰは国立能楽堂プログラム第178、208号に連載された「特集・小書の話」に加筆修正を加えたもので、小書の定義やその種類について詳説する。Ⅱは山中の既発表論文から小書に関する論考

をコンパクトにまとめたもので、小書に古演出をとどめる例や橋掛を使う小書演出、多くの小書を創出した江戸期の大夫親世元章についての論など。Ⅲは現行で演じられる小書の一覧表で、各流で名称は違うが内容を同じくする小書もひと目でわかるように工夫されている。小書とは何かということから、その成り立ちや変遷、現状が一冊に凝縮されており、入門書の立場でわかりやすく解説するが、専門書としての質も極めて高い。

『能よ 古典よ!』(林望著。A5判21頁。1月。檜書店。一九〇〇円)

能の魅力を古典文学との関連を通して紹介する書。「第一章 古典文学と能」は「能に録められた古典文学の絢爛」として、能の詞章中に見えるさまざまな古典文学について述べる。「第二章 林望作劇―『創作能』」には著者による創作能〈黄金桜(仲麻呂)の二作品を掲載。「第三章 むかし むかし」は、「親世」平成十八年四月―二十年四月号の連載「能楽道通」に掲載された稿が中心。

『風姿花伝・謡曲名作選』(表章・小山弘志・佐藤健一郎校訂・訳。四六判330頁。1月。小学館。一八〇〇円)

「日本の古典をよむ」シリーズから出された最終巻で、新編日本古典全集「連歌論集・能楽論集・俳論集」から「風姿花伝」、同「謡曲集」①②から(忠度・井筒・隅田川・舟弁慶 四曲の現代語訳と原文のみを再編した)。出典の新編日本古典全集とは異なり、先に現代語訳を掲出し、そのあと

に当該箇所原文を続ける点が特徴的である。巻頭序文・用語解説・巻末解説は石井倫子による書き下ろし。

「ことばから迫る狂言論―理論と鑑賞の新視点―」(小林千草・千草子著。B6判319頁。1月。武蔵野書店。二三八一円)

国語学者で作家としても活動する著者が、ことばに着目して狂言を論じる。二部構成のうちⅠは小林千草「ことばから迫る狂言論」で、狂言台本や狂言の会話の分析。大蔵虎明本狂言復元についての論考などを収める。Ⅱ千草子「狂言鑑賞の新視点」では狂言の面白さ、楽しみ方を説く。巻末には付録として能舞台図と基礎的参考文献を付す。

『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』(服部幸雄監修。国立劇場企画・編集。A5判255頁。2月。淡交社。三八〇〇円)

前年に刊行された音楽編に続く、国立劇場企画・編集による伝統芸能についての大部の解説書。全十九章から成り、雅楽、延年、放浪芸、能、狂言、幸若舞、歌舞伎、人形浄瑠璃、舞踊、沖繩舞踊、大衆芸能などが取り上げられている。「第4章 能・狂言の成立の背景」(松岡心平執筆)は、能が世阿弥によって大成するまでの過程や親阿弥・世阿弥の経歴について概説する。「第5章 能の舞台と演出・演技」(山中玲子執筆)は、能の基本事項についての解説。能舞台の歴史及び舞台と演技との関係についての項では、特に橋掛の利用法について詳説している。ほかに能の曲目の種類、役種、能楽論、出立の解説、近世から明治維新までの能の歴史についてなど。「第6章 狂言」(石井倫子執筆)は狂言の歴史、演出・演技

や曲目についての解説。「第16章 能—近代から現代へ」(渡邊守章執筆)は、観世榮夫、野上豊一郎、観世寿夫らの業績について述べる。

『能・狂言の基礎知識』(石井倫子著。四六判25頁。2月。角川学芸出版。一六〇〇円)

能と狂言の基本事項をまとめた解説書。「一 能・狂言を知る」では能・狂言の歴史と分類について、「二 能の現行曲 七十五選」「三 狂言の現行曲 二十選」では各曲のあらすじと、「メモ」として作品の魅力や鑑賞ポイントを解説する。「四 能・狂言を見るために」では、能舞台・役者・面・装束・作り物・音楽・演技など、能・狂言を構成する各パーツについて説明する。「五 観劇案内」は、実際に鑑賞するにあたっての疑問に答える形の「そこが知りたい! Q & A」、狂言で頻出する語の解説「知っておきたい狂言のことは」の二項から成り、ガイドブック的な要素も兼ね備えている。巻末には井上愛作成「能と狂言の参考文献」を添える。各所に絵図や写真が配されており、能や狂言を知らない人にも手に取りやすく、かつわかりやすい解説書となっている。

『近代国家と能楽堂』(奥富利幸著。A5判346頁。2月。大

学教育出版。七〇〇〇円)
学位請求論文「近代能楽堂の形成過程に関する系譜的研究—明治期から昭和初期までを対象として」と、書き下ろし稿を一冊にまとめたもの。建築学の見地から近代能楽堂の歴史を分析した研究で、元来屋外に建てられていた能舞台が建物

の中に入った能楽堂へと変遷していく、その成立と過程をひもとく。「序章 近代国家のかたちとしての能楽堂」では、能楽堂についての概説のほか、能楽以前の芸能について舞台や演じられる場を基軸に時代を追って説明し、近代に入ってから成立した能楽堂の歴史についても概観する。「第一章 式楽から伝統芸能へ—対置式能楽場の系譜—」では、能楽堂成立以前の、明治天皇能楽御覧の場となった華族邸宅の能楽御覧所や、博覧会や近代実業家邸宅の能楽場についての論考。

「第二章 劇場としての能楽堂—囲繞式能楽堂の系譜—」は能舞台から能楽堂へと変わる過渡期を、図面や写真を検討しながら追う。「第三章 能楽堂の改良と進化—入れ子式能楽堂の系譜—」では、能楽堂が改良を重ねながら舞台・客席ごと建物の中に入った形式の入れ子式能楽堂に至るまでを論じていく。「第四章 近代能楽堂形成の理念」では、近代能楽堂の問題点を評した西洋の建築家ブルーノ・タウトの評と世阿弥の芸談「申楽談儀」第十七条に共通するものを見出すほか、近代能楽堂成立にかかわった建築家七名を紹介する。なお、本書収録の論文のうち、同年発表の論文(第三章第二節・同第五節)については「能楽史研究」の項でも紹介している。

『近代能楽史の研究—東海地域を中心に』(飯塚恵理人著。A5判23頁。2月。大河書房。八六〇〇円)

一字違いの「近世能楽史の研究—東海地域を中心に」(平成十一年)に続く、著者による十年ぶり二冊目の東海地方

能楽史の研究書。前著が江戸時代の歴史であったのに対し、本書では幕末から近代以降を取り上げる。「第一部 幕末から明治維新にかけての能楽界」は、幕末から明治初期にかけて、東海地方で能にかかわった人物の事蹟を追う。「第一章 大須賀鬼卯著『東海道人物志』に見られる能楽愛好者―能楽の伝播と街道沿いの数寄者たち―」では享和三年奥書『東海道人物志』から、能芸をたしなむ人物を抜き出し、一覧表として掲出する。「第二章 金春朋之助安治追跡―幕末・明治の金春八左衛門家―」は尾張藩お抱えであった金春八左衛門家の朋之助安治について、墓碑や過去帳、演能記録、安治筆の謄本など、関連資料を博搜する。第三・四章では「吾妻能」について取り上げる。「第二部 明治・大正期の能楽―数寄者の時代―」は、明治期の名古屋能楽界や、夏目漱石の謔の稽古、尾張藩御用商人であった関戸家と能のかかわり、今様能楽などについて。「第三部 メディアと能楽―蓄音機レコード・新聞・ラジオの時代―」は、主に大正から昭和初期にかけて取り上げ、新聞社主催能、新聞記事、レコードやラジオ放送などの各媒体によって能楽をはじめとする伝統芸能のあり方が変化する様相を論じる。数少ない地方の能楽史、しかも近代能楽史の研究書という点が貴重である。

『世阿弥発見一〇〇年 吉田東伍と能楽研究の歩み』（佐藤和道編。B5判80頁。3月。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館。五〇〇円）

三月に早稲田大学演劇博物館で開催された企画展示の図録。

明治四十二年に歴史地理学者吉田東伍が世阿弥伝書を発見してから百年が経ったことを記念しての展示で、東伍の経歴、周辺を追いながら遺品や原稿、著書とともに世阿弥伝書、禪竹伝書をはじめとする能楽伝書が紹介されている。展示品の写真および解説に加え、表章「能楽論研究一〇〇年の歩み」、落合博志「松廬舎文庫本世阿弥伝書の記録―堀家旧蔵本および種彦本申楽談儀―」、横山太郎「十六部集」刊行後の世阿弥受容」の小論三本を掲載する。末尾には雑誌「能楽」に掲載された東伍の論文八本を転載する。本書については「能楽論研究」の項でも紹介している。

『能、戯曲解釈の可能性（草刈の能から狭衣まで）』（平林一成著。A4判251頁。3月。早稲田大学出版部。二九五〇円）

早稲田大学が若手研究者の学位論文を出版する制度「早稲田大学モノグラフ」第二回による、同タイトルの博士學位論文の単行本化。能を戯曲として捉え、徹底的に分析していく手法をとる。各論は検討作品が成立した時代順に配列されており、第一章「写実劇の到達点―世阿弥から見た、その可能性と限界―」では、「貞和五年春日臨時祭祀」の演目や（草刈の能・守屋）など、世阿弥以前の能について論じる。第二章「抽象的歌舞能の極点へ―世阿弥晩年の作風―」は（山姥・砧）の作品研究。「第三章 歌舞能のもう一つの極点―元雅と禪竹―」では元雅作（歌占）と禪竹作（野宮・芭蕉）を扱う。

「第四章 転換するドラマツルギー」は応仁の乱以降成立し

た作品についての論考で、親世信光作(氷上)と、素人作者による作品(狭衣・半節)について論じている。

『英訳付き 1冊でわかる日本の古典芸能』(中村雅之著。

Jeffrey・Hunter 訳。B 6判191頁。3月。淡交社。一九九〇円)

横浜能楽堂副館長の著者が日本の古典芸能についてわかりやすく解説した英訳付きのガイドブック。能・狂言、文楽、歌舞伎、雅楽、神楽、声明、日本舞踊、琉球舞踊、寄席芸について紹介する。ほぼ全ページにわたり、見開きの左ページに日本語による解説、右ページに英語による対訳が載る。最初の項目「能・狂言」で、歴史や基本事項の解説のほかに、(いつ、どこで見られるか)という項を設け、現存する能楽堂の公演状況や鑑賞時の注意点についても説明がなされている。最終項目「日本の楽器」は、各分野で用いられる楽器を、写真を交えつつ紹介する項で、能管、大鼓・小鼓、太鼓の説明も載る。巻末には頻出する専門用語の和英辞典を付す。日本の芸能について知りたい外国人にとっても、日本人研究者が英語で論文題目や要旨を執筆する場合にも便利な書。

『読んで愉しむ能の世界』(馬場あき子著。A 5判286頁。3月。淡交社。二〇〇〇円)

能の作品をテーマとした随筆集。昭和五十年刊行「花と余情 能の世界」収録の随筆のうち十六編と、「新能楽ジャーナル」(たちはな出版)に平成十六年一月から平成二十年十一月に連載された「作り物随想」を、一冊にまとめたもの。神田佳明・堀上謙撮影の舞台写真を多数収録。

『能苑逍遥(上) 世阿弥を歩く』(天野文雄著。四六判310頁。3月。大阪大学出版会。二一〇〇円)

公演パンフレットなどに執筆した小論を集めた、能苑逍遥シリーズ全三冊のうちの第一冊。本冊には副題の通り世阿弥についての論考が収められており、「第一部 世阿弥の事蹟を歩く」は世阿弥の経歴についての歴史的考察が主体で、世阿弥の名の由来や禅との関係、佐渡配流に関する論考などが並ぶ。「第二部 世阿弥の理論を歩く」は世阿弥能楽論についての論考で、「申楽談儀」の新解釈を提示する論など。「第一部 世阿弥の作品を歩く」には世阿弥の能作品(高砂・楡垣・頼政・井筒・砦・千寿・泰山木・清経・忠度)等についての論を収める。短い小論が中心だが、どれも読みごたえのある内容である。

人物叢書「世阿弥」(今泉淑夫著。日本歴史学会編集。四六判297頁。3月。吉川弘文館。二一〇〇円)

日本歴史学会が編集する人物叢書シリーズから出された世阿弥の伝記。歴史学の立場から世阿弥を詳説する。前半の第一から第三では世阿弥の人生を初期・中期・後期の三期に分けて論じる。第四は世阿弥の作能について、第五は世阿弥の芸論についての解説。「第六 世阿弥と禅」では、芸論や金春大夫あて自筆書状にみる禅、および同時代の禅僧岐陽方秀との接点について論じており、著者が禅宗の歴史研究の専門家であるため、多くの紙幅が割かれ、詳細な内容となっている。巻末には系図と略年譜を付す。

「能楽と崑曲 日本と中国の古典演劇をたのしむ」(赤松紀彦・小松謙・山崎福之編。A5判102頁。3月。汲古書院。二五〇〇円)

能と中国の崑曲を比較しながら両者を解説する入門書。第一章であらまし、第二章で舞台、第三章では「しぐさ」と「しらべ」が解説されており、第四章にはことばとしぐさについての実例が掲げられる。巻頭には両演劇の舞台カラー写真を掲載、巻末には崑曲俳優張継青のインタビューおよび池田敬子によるエッセイ「崑曲「牡丹亭(還魂記)」と室町物語「転寝草紙」が載る。

「ギリシア劇と能の再生 声と身体の諸相」(佐藤亨ほか著。A5判295頁。3月。水声社。四〇〇〇円)

青山学院大学総合研究所叢書から出された、同研究所人文科学研究部門の平成十八・十九年度研究プロジェクトの成果刊行物。西洋文学研究者がギリシア劇と能を比較・研究した研究書。二部構成で、能にかかわる主な論考は「第一部 東西を超えた変容」に収録されており、中條忍「ギリシア悲劇、能、ミサ典礼 ポール・クロードの劇作術」、廣木一人「能「隅田川」とは何か オペラ「カリーユ・リヴァー」を通して」、伊達直之「W・B・イエイツの象徴詩劇における「能」と舞踏の再生」の三本。第二部「古典劇の歴史的現在形」は西洋演劇の論考が中心。

「平家正節」盲人伝承八句くライブ映像と検索」(研究代表遠山一郎。B5判71頁・DVD付。3月。愛知県立大学

文学部)

科学研究費補助金基盤研究(S)「戦に関わる文字文化と文物の総合的研究」の研究成果報告書。平曲譜本の諸本、記譜法などテキスト研究・音楽研究のほかに、「語り芸としての「平家正節」(林和利執筆)では、狂言における平曲の撰取について、事例を掲げながら紹介する。付録DVDには、今井検校勉による平曲演奏の映像や平家正節の活字翻刻の検索機能などを収める。

「能狂言の文化史 室町の夢」(原田香織著。四六判274頁。3月。世界思想社。一三〇〇円)

能・狂言を文化史的視点で通史的に解説した書。「第一章 祈りのかたち 能楽前史」には能以前に成立した関連芸能について詳述。「第二章 能の文化サロン」は中世・近世に能を支えた権力者や文化圏について述べる。「第三章 能の大成」は親阿弥・世阿弥・世阿弥以降に分けて、能作者の業績とその作品、作風について紹介する。「第四章 狂言をかしの美学」は、狂言の歴史と作品の解説およびその思想と美学について。「第五章 現代の能楽」は近代以降の名人や新作能・狂言等について。巻末には能楽史関係略年譜と能楽堂案内、索引を載せる。

能の翻訳2「能の翻訳の諸相と可能性——伝書英訳の比較と用語リストの作成・活用」(野上記念法政大学能楽研究所編。A4判103頁。3月。野上記念法政大学能楽研究所)

本研究が平成十九年・二十年度に能楽研究の国際化を目

ざして行った活動の報告書。序論として伊海孝充「能楽研究の国際化に向けて―付・フランク・ホーレーの能楽研究の紹介―」では外国人の能楽研究を紹介しながら当該活動の意義を説明する。「第一部 英訳を用いた世阿弥伝書研究の試み」は、世阿弥能楽論英訳文献の比較検討報告で、江口文恵「世阿弥伝書用語英訳比較データ概要」、遠見・あてがひ・心の三語の英訳の用例を比較した「世阿弥伝書用語英訳比較データ(試験版・抄)」、玉村恭「翻訳者/解釈者の使命―世阿弥伝書用語英訳比較の射程―」を収める。「第二部 能楽用語英訳リストの作成と活用」は、中司由起子「英訳リストの作成とその活用」と六種に分類された用語リスト一覽表を掲載する。末尾には実践編として、本学国際日本学インスティテュートの演習で用いた、英語で書かれた能の梗概・模範例の分析や、夢幻能の構造の英訳、日本人が実験的に書いた英語による能の梗概・学会発表要旨などを載せる。

『中世芸能の形成過程』(植木行宣著。A5判45頁。3月。岩田書院。一一八〇〇円)

著者による芸能文化史論集(全三冊)のうちの第一冊。本冊では中世芸能の成立と展開についての論考を収録。「第一章 田楽―その成立と展開」は田楽の歴史についての章で、現在も中国地方各地に残る囃子田についても紹介する。「第二章 猿楽―その成立と展開」では猿楽から能への形成過程を詳述するほか、「第五節 南山城の神事能」で京都南山城村諏訪神社・田辺町朱智神社の神事能を、資料に基づきながら紹介

する。「第三章 延年―先行芸能の継承と創造」は延年の歴史と絵画資料からの分析、「第四章 『平家物語』の芸能的環境」は『平家物語』を芸能史の面から考察する。「第五章 芸論の芽生え」は楽書の検討から芸論の成立について考察する章で、特に「教訓抄」を重点的に分析する。「付 京都近郊村落にみる中世後期の生活と芸能文化」では、京都周辺における中世後期の芸能文化、主に連歌、茶、風流などについて概観する。

『世阿弥と複式夢幻能―上方地域における精神的古層を探る―』(A4判59頁。3月。大阪府立大学)

平成二十年十一月に大阪府立大学で開催された公開シンポジウムの報告書。天野文雄「世阿弥はなぜ夢幻能を飛躍的に洗練させることができたのか」、西平直「伝書」を書く世阿弥から見た複式夢幻能―「離見の見」を手掛かりとして―、川戸圓「世阿弥の複式夢幻能とユング心理学」の各発表とパネルディスカッションの講演記録を収録。

『能楽史年表 近世編 中巻』(鈴木正人編。A5判44頁。4月。東京堂出版。一五〇〇〇円)

前年に刊行された上巻に続く、近世の能楽史年表をまとめた書の二冊目(全三冊の予定)。本巻には元禄〜正徳年間の能に関わる記録を収める。約三十年分と収録年数こそ短めだが、能好きで知られる徳川将軍綱吉・家宣の時代というところもあり、この時期の能界の盛況ぶりが本巻を開いただけで窺える。平成十九年刊行の中世編と同様に、演能記録のみならず、書

物の刊行や役者の拝謁・拝領記事なども立項する点が非常に有効で、能の歴史を包括的に捉えようとする編者の姿勢が窺える。仙台藩の記録ばかりの頁が見える点若干気にかかると、活字化されていない文献もカバーしているその資料的価値は高いと言えよう。書籍としてももちろん有益だが、今後データベース作成の基盤となり得よう。

『能の集積回路 堀上謙評論・随想集』（堀上謙著。四六判377頁。4月。ちばな出版。二六〇〇円）

能楽評論家で、『能楽ジャーナル』編集長でもある著者の、『能楽展望』（平成十四年）に続く二冊目の評論集。Ⅰ「時評・随想」には、能界の時事問題などを、Ⅱ「能界展望・書評」には昭和五十・五十二・五十八・平成八年十二月、同九（十九年）の能界についての評と書評、Ⅲ「芸能逍遙・劇評」には能以外の芸能の評論を収める。近年の評論が中心だが、当時の能界について知らなくても、その頃の出来事が生々しく伝わってくる。

『日本文藝史別巻 日本文学原論 付・全巻索引』（小西甚一著。A5判888頁、索引280頁。5月。笠間書院。一五〇〇〇円）

『日本文藝史』全五巻（講談社）の別巻として構想されたものだが、平成十九年著者死去により、遺稿を刊行委員会が加筆・整理し、刊行にいたったもの。別冊として『日本文藝史』および本書の全索引を付す。著者の原稿が未完成である旨を示す注など刊行委員会が加筆した箇所にはすべて二重山

括弧〇が付され、著者の執筆と区別されている。文学を事実、解釈・理論、表現、現象の各次元に分けて論じる。能については「餘論ふうな結語」中の「能本と作者」で能の歴史や変容ぶりについて論じる。未完成原稿が多く、著者生前に完成に至らなかつたことが惜しまれるが、日本文学および文学研究の問題点を突いた大著。

『翁 第百回素謡会記念誌』（白河謡曲会編。B5判51頁。5月。白河謡曲会）

福島県白河市で活動する素謡会の第百回記念誌。当日のプログラムと会の記録を掲載するほか、地元になんだ作品として、本研究所田中允文庫所蔵の田中允透写による番外曲（白河関）の謄本写真を載せる。

『能楽演出の歴史的研究』（岩崎雅彦著。A5判327頁。6月。三弥井書店。七九八〇円）

著者が第三十二回法政大学能楽賞を受賞する理由となった書で、能楽の演出の変遷について着目し、数々の演出資料や他の芸能と比較とともに、作品の構想や成立・展開が論じられている。「第一章 能の作品の構想」は、（吉野静・景清・嵐山・屋島）の構想論や、（安宅）の摂取方法から浄瑠璃（凱陣八島）「出世景清」の先後関係を考える論が収められる。

「第二章 能の演出の歴史」は雑誌「観世」に執筆した作品研究六編で、（真服・野守・仏原・室君・東方朔・一角仙人）について、各曲の演出の歴史が論じられる。「第三章 能の扮装の変遷」は、能の演出に着目した章で、観阿弥が取り

入れた曲舞が音曲のみならず、女性芸能者が烏帽子を着けるその扮装にも及ぶ点を指摘するなど、テキスト以外の面からも多角的に能楽を捉えた論が並ぶ。「第四章 間狂言の形成と展開」には、能の間狂言についての論考が収められており、末社アイの創出者を観世小次郎信光と推定するなど、興味深い論が展開されている。

『若狭の翁と猿楽能』(山田雄造著。A 5判272頁。6月。風詠社。二〇〇〇円)

福井県で高校に勤務していた著者が、現地の芸能について独自に調査・研究したものをまとめた書。第一章「寛文の『小浜藩神社書上帳』に見る若狭の翁・猿楽能の分布」では、神社書上帳をもとに、神事祭礼で行われる翁や猿楽能などの民俗芸能について、中世から江戸初期頃までの実態を探る。第二章「寛文以降の史料に見える猿楽能と能禄米」では、江戸中期から後期の史料を用いて猿楽能と禄として与えられる能禄米について論じる。「第三章 帰山大夫の翁猿楽から倉大夫の猿楽能へ」は、中世の帰山(気山)一座に関する史料や慶長頃からその名が見える倉大夫についての記録を中心に紹介・考察し、中世・近世の若狭猿楽の歴史を追う。第四章「江村家の翁旦那場と座の衰退」は気山座の末裔江村伊平治家文書を紹介しながら、江戸期から現代に至るまでの歴史について論じる。

『新蔵生田文庫蔵書目録并解題』(関屋俊彦編。A 4判128頁。6月。関西大学)

科学研究費基盤研究(C)「能楽資料の調査と整理―大蔵藏右衛門所蔵伝書と新生田文庫本―」(代表関屋俊彦)の研究成果報告書。昭和二十三年に生田家から関西大学に寄贈された蔵書群が生田文庫の残余蔵書が、新蔵生田文庫として新たに同大学に寄贈された。その蔵書目録と解題。能楽関係写本、同版本、明治以降能楽関係刊本、その他諸芸能、芸能以外諸書、書簡の六部分に分かれた目録と解題および番謡写本曲名索引を収録。

『江戸演劇史 上・下』(渡辺保著。B 6判507・517頁。7月。講談社。各二八〇〇円。)

演劇評論家である著者による、江戸時代の演劇史を二冊にわたって綴った書。豊臣政権時から幕府崩壊直前までの演劇にまつわるできごとを時代順に論じていく。歌舞伎・人形浄瑠璃が中心だが、上巻の第一章に太閤能、第二章五に大蔵虎明、第三章四に徳川綱吉・家宣・間部詮房らと能について、下巻第十一章十に江戸城最後の謡初が取り上げられている。

『能楽師関根祥六・祥人・祥丸 芸三代心を種として』(広瀬飛一写真。A 4判変型123頁。7月。小学館スクウェア。二八五七円)

観世流シテ方能楽師、関根家三代の写真集。巻頭には平成二十年十月に行われた祥六喜寿記念三代能の(菊慈童遊舞之楽・卒都婆小町・鷲)の舞台写真をカラーで掲載、後続の写真は白黒で、舞台写真のほか稽古・申合せ風景、家族写真等を取める。途中には「折々のことば」として祥六師の言説を

挿み、末尾には祥六・祥人・祥丸各師の芸談および三人の年譜を備える。刊行当時は親子三代で舞台に立った記念の位置づけであっただろうが、刊行翌年の平成二十二年に、祥人師が若くして亡くなった今としては、貴重な資料となった。

『能苑逍遙(中) 能という演劇を歩く』(天野文雄著。四六判324頁。8月。大阪大学出版会。二一〇〇円)

先に紹介した上巻に続く能苑逍遙シリーズの第二冊。能を演劇として捉えて考察した作品論や演出論が収められる。前掲上巻に世阿弥作品の論考が一部収録済みであり、本書には世阿弥以外の作品の論考が多く収められている。「第一部 能の演出と演式を歩く」では現行曲の本来の演出や江戸時代に行われていた演出などについて論じる。「第二部 復曲を歩く」は稀曲の復曲や古演出復原にまつわる論考七篇。「第三部 戯曲としての能を歩く」には源氏物や卒都婆小町・菅承相・炭焼の能・花月・自然居士・楊貴妃・敷地物狂・那那・狸々・維盛・氷室・鞍馬天狗・舍利・女郎花・杜若についての各作品論を収める。

『古典の精髓』(林和利編。B6判208頁。9月。世界思想社。一九〇〇円)

平成十九年に早稲田大学創立百二十五周年記念の一環として行われた、朝日カルチャーセンター栄教室での連続講座「日本文学の精髓を楽しむ」の講義録。日本古典文学の魅力、各分野の専門家がわかりやすくすくひもとく。「第一章 万葉集 文化としての旅の歌」(島田修三)、「第二章 源氏物

語―究極の恋の姿」(久保朝孝)、「第三章 平家物語における「運命」―「副將被斬」を読む」(大森北義)、「第四章 能と狂言の表現手法と価値」(林和利)、「第五章 歌舞伎の歴史―興行を主として」(鳥越文蔵)。

『夢野久作の能世界 批評・戯文・小説』(夢野久作著。A5判253頁。9月。書肆心水。三三〇〇円)

作家夢野久作の、能に関する著作を一冊にまとめた書。批評等は「夢野久作著作集4」(昭和五十四年)からの再録で、「能とは何か」「喜多流とともに」「能と人びと」の三部に分けられる。能(綾鼓)をもとにした小説「あやかしの鼓」は「夢野久作全集3」(平成四年)からの再録。

『風姿花伝・三道 現代語訳付き』(竹本幹夫訳注。A6判47頁。9月。角川学芸出版。八九五円)

角川ソフィア文庫「日本の古典」シリーズから出された、世阿弥能楽論書二作品の注釈と現代語訳。段ごとに分けて脚注付きの本文を掲出し、その後ろに現代語訳、解説を備える。久々の新しい注釈書であるとともに、「三道」は訳注者が発見した吉田文庫蔵新出本を底本とする。堀家旧蔵と目される松廬舎文庫所蔵の世阿弥能楽伝書が、関東大震災で焼失して以来、「三道」については「世阿弥十六部集」所収本文を底本とするしかなかったが、松廬舎文庫本の影写本である吉田文庫本の出現により、最善本を用いた新しい本文を提供できることになった。これは学界にとっても大きな価値がある。巻末解説では、「三道」を相伝された、世阿弥の息子元能に

ついで、従来言われてきた一座の補佐役説に疑問を投げかけ、本来は一座を率いて独立すべき立場であった可能性を提示するなど、新しい説も展開される。

野上豊一郎批評集成「能とは何か(上)入門篇」「能とは何か(下)専門篇」(野上豊一郎著、A5判全760頁。10月。書肆心水。(上)四七〇〇円・(下)五七〇〇円)

本学元総長で本研究所発足の尽力者でもある著者の著作から「能」研究と発見「能の再生」「能の幽玄と花」の著作三冊を、再分類の上、二冊に再編成したもの。上巻「入門篇」は全五部から成り、「I 役者論」には主役一人主義や子方ワキ方についての論などを、「II 奥義論」に物狂や能の幽玄・花などについての論考を載せる。「III 構成論・様式論」には序破急や能の幽霊についてなど、「IV 面論」には能面創作や女面について、「V 謡曲論」には翻訳論と、能を理解する上での基本事項にまつわる論を収録する。対する下巻「専門篇」は四部構成で、より奥へと進んだ論考が集められている。「I 奥義論」は能の位や物真似についての論、「II 構成論・様式論」には能の局面区分法・構成について、ギリシア劇との比較、問狂言や翁の研究などを収める。「III 謡曲論」には車屋本に関する論考三本を、「IV 面論」には伎楽面・舞楽面や尉面・般若面・蛇面の研究を収める。上・下巻ともに巻末に共通の曲名索引を備える。

『世阿弥の稽古哲学』(西平直著。四六判296頁。11月。東京大学出版会。三〇〇〇円)

世阿弥能楽論を哲学の立場から分析した書。「1章 伝書はいかなる視点から読まれてきたか」は禪の思想や演劇論の立場から世阿弥伝書を読もうとする。「2章 伝書理解のための補助線」は図式化することで世阿弥の理論を把握する試みが展開される。3章から5章は稽古論にまつわる論考で、「3章 稽古の教えに秘められた智慧」は、稽古の順序の重要性に着目した論考。「4章 稽古開始以前のことも」は稽古開始を世阿弥が七歳とする説を子どもと身体性を通して理解しようとする。「5章 稽古における型の問題」では能瀬朝次や親世寿夫についても論がおよぶ。「6章 伝書における無心の厚み」「7章 伝書における二重の見」は世阿弥伝書の用語「無心」「離見の見」などについての考察。「8章 有主風と我意分」では当該語を用例から分析し、名人の境地における創造性・主体性と結びつける。「9章 息と音楽性」は世阿弥伝書を音楽性や息づかいの見地から読み解く論で、現在における謡の稽古での息づきの重要性とも通じる。「10章 序破急」は、現代の能楽師も用いる当該用語について捉え直す論。

『渡邊守章評論集 越境する伝統』(渡邊守章著、A5判548頁。12月。ダイヤモンド社。五九〇〇円)

演出家でフランス文学研究者でもある著者の、主として二〇〇〇年代の評論を集めた書。内容は能楽のほか、ピナ・バウシュ、ポール・クローデル、モリス・ベジャール、オペラ、歌舞伎と多岐にわたる。主な能楽関係箇所のみ以下に掲

ける。「第一章 演劇作業における「古典」と「伝統」では、観世寿夫や野村萬斎、伝統演劇の言語や身体性についての論が並ぶ。「第二章 「繻子の靴」の余白に」は、劇詩人ポール・クローデルについて書かれた章で、彼と能の関係について論じた「クローデルと能」ほかを収める。「第三章 クローデルの微の下に」では自身作の創作能について書かれたものを中心。「第四章 「墓」あるいは「喪の献盃」」には観世榮夫、荻原達子らへの追悼文を収める。

『平成二十一年度国立能楽堂特別展示 細見コレクション 琳派にみる能』（国立能楽堂編。A4判変型67頁。12月。日本芸術文化振興会。二二〇〇円）

二十一年十二月から翌年二月にかけて行われた国立能楽堂特別展示の図録。故細見良にはじまる細見家三代の蒐集品細見コレクションから、「能」をキーワードに、光琳派の美術工芸品を中心に紹介。能装束など能・狂言に直接かわるものほか、能・狂言の舞台風景が描かれた絵画、本阿弥光悦の書、能の作品世界をモチーフにした図案を用いた工芸品など、展示品の写真を掲載。巻末には作品解説・琳派作家系図・作者解説・用語解説・作品リストが載る。

『閑居と乱世』（佐竹昭広著。A5判531頁。12月。岩波書店。九四〇〇円）

『佐竹昭広集』（全五巻）の第四巻。三部構成で、「I 閑居の文学」は「方丈記」「徒然草」などの隠者文学の論。「II 下剋上の文学」に著者の同名著書（昭和三十二年、筑摩書

房）を再録しており、御伽草子や狂言についての論が載る。「III 室町点描」は室町時代にまつわる多様な論考が収められており、能楽研究においても重要な資料「東勝寺鼠物語」の解題（初出は「室町」ころ。中世文学資料集、昭和五十三年、角川書店）などが載る。

『世阿弥の能改革』『稽古は強かれ、情識はなかれ』（曾我孝司著。四六判155頁。12月。雄山閣。二四〇〇円）

世阿弥の人生や業績を紹介する書。「第一章 観世座の能改革」は観阿弥以前から世阿弥失脚までの歴史を、観阿弥・世阿弥の業績を中心に解説する。「第二章 能改革と能面」は「申楽談儀」第二十二条を手がかりに、世阿弥時代の能面についての考察。「第三章 能改革と座の変容」では観世座の芸風の変容について、世阿弥能楽論を根拠に論じる。「第四章 「風姿花伝」の成立」は「風姿花伝」の解説。「第五章 世阿弥の教育論」では高校教員である著者が世阿弥の能楽論を教育論として読み説く。稽古のあり方を説く「風姿花伝」年来稽古条々のほか、「花鏡」「三三」「九位」「遊楽習道風見」等から教育に通じる箇所を、発達に応じた教え方、教えの要件、学びの要件、初心者の方に分けて紹介する。教育者としての著者の経験が生かされ、本章に多くの紙幅を割き、力を入れて論じている。「第六章 観世座ゆかりの地探訪」は、結崎・伊賀小波田・今熊野神社・浅間神社・談山神社・醍醐寺の紹介。（江口）

【資料研究】

まずは、資料目録の類から。佐藤和道「川崎九淵旧蔵資料追加寄贈目録」(『演劇研究』32。3月)は、早稲田大学演劇博物館が所蔵する葛野流大鼓方川崎九淵旧蔵資料のうち、平成十九年に追加寄贈を受けた分の目録。近代の版行謄本、大正二年、昭和二十五年の演能控、昭和十八年、昭和三十三年の九淵自筆の日記を中心とする資料で、とりわけ日記は戦時下の能楽史料として貴重。同稿の後半に、「戦時下の能——川崎九淵日記」抄」として、昭和十八年、二十年の日記から能楽記事を抄出した翻刻が載る。伊海孝充「波吉家文書」目録稿(『国立能楽堂調査研究』3。3月)は、国立能楽堂に所蔵される波吉家伝来の能楽資料の解題目録。波吉家では中世以来続く加賀の猿楽で、江戸期には加賀藩の能役者として活躍。歴代の活動や履歴についても触れ、約七十点に及ぶ資料の概略が示される。資料は謄本・付・番組・能面関係資料など多岐にわたるが、中でも元禄から幕末にいたる膨大な起請文が目され、波吉家の活動の軌跡を示す重要な資料となっている。そのうち、寛政十一年の起請文に「若州小浜倉熊之助」、文化四年の起請文に「若州小浜倉小文次政徳」の名が見え、解題では後者に関して不明の人物としているが、この二人は若狭倉座の能大夫である。当時、倉座の大夫が宝生流に所属していたことを示す資料として興味深く、鴻山文庫蔵の文化四年奥書「宝生流能装束附」にも「倉小文治篤

恭」の名が見える。

近世能楽史に関する資料紹介として、三浦裕子「金春又右衛門流太鼓方鈴木家について」(武蔵野大学「能楽資料センター紀要」20。3月)、永井猛「鳥取池田藩演能記録」宝永八年・正徳元年(一七一—分)、『芸能史研究』184。1月)、浅見恵・松田存「盛岡南部藩「御能日記」(三十五)」(総合芸術としての能」14。8月)があった。三浦稿は広島藩お抱えの太鼓役者・鈴木家の「系図」の紹介。同家所蔵「系図」に基づき、歴代の履歴をまとめる。それによると、同家は浅野家が和歌山藩主であった時代から小姓として仕え、二代目以降、太鼓役をつとめるようになった家系という。広島藩の能楽資料はほとんど残されておらず、その点で注目すべき資料といえよう。永井稿は、「芸能史研究」131・133・135号に掲載された鳥取藩藩政日記の能楽抄出記事の続編。前号では収められなかった宝永八年(正徳元年)の一年分を収める。浅見・松田稿は長く雑誌「宝生」に連載されていたものの続きで、今号には文政七年五月から十二月までの記事を収める。

近代能楽史に関する資料を取り上げたものもいくつかあった。初代梅若実資料研究会「梅若六郎家蔵「門入姓名年月扣」翻刻および人名解説」人名索引・補遺(武蔵野大学「能楽資料センター紀要」20)は、同誌に数回にわたって掲載された梅若実の門人帳「門入姓名年月扣」の人名索引。明治能楽史の基本資料たる同書の検索が容易になったのは有難い。一方、戦時下の能楽史を取り上げるのが、棚町知彌「能楽界

の戦中期」〔演劇研究〕³²である。野上弥生子の小説「迷路」を起点として、戦時下における能楽界の動向を明らかにすべく、「謡曲界」などの雑誌等から様々な記事を引用する。一部、江島伊兵衛が「戦時下能楽資料」としてまとめられていた当時の資料（鴻山文庫蔵）の翻刻も載る。それはそれで有用だが、膨大な資料が十分に整理されずに並んでおり、通読しづらいのが難である。

演出資料に関しては、喜多真王「翻刻「舞曲寿福抄」後藤得三本（一）」（国立能楽堂調査研究）³、飯塚恵理人「豊嶋十郎筆「高安流仕舞附 人（六）」」（名古屋芸能文化）¹⁹、12月の二本があった。前者は喜多古能の能伝書「舞曲寿福抄」の翻刻・紹介。底本は後藤得三による昭和三十八年の書写本。ただし、その書写本の所在も現在は不明で、喜多流刊行会所蔵の電子複写に基づいて翻刻がなされている。従来唯一の伝本として知られていた東京国立博物館本「舞曲寿福抄」が欠く、後半部分の各曲についての記述をも備えた完本である点が貴重。江戸後期喜多流の素性確かな伝書であり、今後の演出研究に資するところ甚大であろう。飯塚稿は、高安流の豊嶋十郎が筆写したワキ方仕舞附の紹介。同誌に継続して翻刻がなされているもので、今号には天・地・人の三冊のうち、人冊の「熊坂」から「吉野静」までの五十四曲を収める。

謡本を取り上げたものが一本。安岡充令「形態と文字からみる室町期謡本（下）」〔専修国文〕⁸⁵。9月）は、世阿弥自

筆本・金春禪鳳本・喜勝本・車屋本などを取り上げた（上）（中）の続編。（下）では、永正から慶長初期の親世流謡本を対象とし、その形態や筆跡の時代的変遷を辿る。当該期の謡本を、天正期を境に前期と後期に分け、前期の謡本ではもっぱら連綿体による筆記がなされているのに対し、後期の謡本では、非連綿体によるものが増加し、形態面においても斐紙帖装本の豪華な装幀が多く見られるようになる、とする。慶長期に斐紙帖装の豪華本が多く出現することは、謡本史研究において早くから指摘されているところであるが、その変遷と文字表記（連綿体か非連綿体か）とを関連づけた点が本稿の眼目といえよう。しかし、参照図版として拳がっている写真を見る限り、連綿体か否かの判断はやや曖昧であり、右のように謡本全体の時代的傾向と読み取るとは困難であろう。その謡本の時代的変遷を享受者層の変化と関連づけて論じるのも無理があり、にわかには首肯しがたい。むしろ、謡本筆者個々人の書風に左右されるところが大きかったのではなからうか。その意味で、親身愛の自筆謡本について、慶長期になると非連綿体の筆法をもっぱら用いるようになるとの指摘は興味深かった。光悦謡本などの古活字本の筆法が、同時期の鈔写謡本に影響を与えた一例と言えるかも知れない。

この他、能の絵画資料を取り上げた論稿として、樋口一貴「新出「百万」絵巻に関する絵画的考察」（国立能楽堂調査研究）³が管見に入った。能の物語を絵画化した作品のうち、従来知られていた「百万」絵本（絵入り謡本「百万」

とはほぼ同じ図様を持つ新出の「百万」絵巻を紹介し、その絵画的な位置づけを試みたもの。両者の図様の比較から、「百万」絵巻は「百万」絵本に先行する作品で、その祖本に位置付けられるとして、十六世紀の制作かと推測する。

能管に関する論稿もあった。高桑いづみ「x線透過撮影による能管・龍笛の構造解明」(『無形文化遺産研究報告』3。3月)がそれで、近年、鼓胴や能管など能の楽器の歴史について精力的に研究を進めている著者の成果の一つ。標題にあるように、能管の内部構造のx線調査に基づき、能管の形成過程を考察した論で、能管に特徴的と見られていた喉を挿入する工法を用いず、別材を接いで内径を狭くした事例がいくつか見られることを指摘。龍笛の工法との比較から、能管の成立についても論が及ぶ。

また、この年の四月から、雑誌「親世」表紙見返しに松岡心平の監修による「親世文庫の文書」という連載が始まった。親世文庫に寄託される親世家伝来の様々な能楽資料を次々紹介するという企画で、同年には以下の資料が取り上げられた(括弧内は担当執筆)。二条康道「猿楽故実」(小川剛生)、「慶安五年薪能記録」(高橋悠介)、「親世左近宛無学宗衍書状」(長田あかね)、「紅爐點雪集」(中尾蕙)、「檜垣」他五番型付(横山太郎)、「茂山忠三郎良豊筆「居杭」居杭拔書」(橋本朝生)、「父尉・延命冠者につき覚書」(宮本圭造)、「親世宗節筆「却来華」拔書」(松岡心平)、「御能造花書付」(伊海孝充)。宗節筆「却来華」の断簡をはじめ、ほとんどが

学界未知の新資料であり、各執筆者による解説も短文ながら重要な指摘が多い。(宮本)

【能楽論研究】

平成二十年は、明治四十二年(一九〇九)に吉田東伍が「世阿弥十六部集」を刊行してから百年目にあたる年であった。同年三月一日から二十五日にかけては、早稲田大学演劇博物館で展覧会「世阿弥発見一〇〇年」吉田東伍と能楽研究の歩み」が開催され、これまで一般の目にふれることの少なかった吉田文庫の資料も多数、展観された。その中には、「世阿弥十六部集」の底本である松廬舎文庫本を影写した「三道」など、新発見資料も含まれる。同展覧会の図録(3月)は、それらの資料写真が豊富に盛り込まれている他、表章「能楽論研究一〇〇年の歩み」、落合博志「松廬舎文庫本世阿弥伝書の記録」堀家田蔵本および種彦本申楽談儀」、「横山太郎「十六部集」刊行後の世阿弥受容」などの論文、また単行本未収録の吉田東伍の能楽・芸能関係論考のうち重要なものが掲載されている。表論文は、吉田東伍以来の能楽論研究の概観、落合論文は明治末期の古書愛好者の会合「欣賞会」における出品目録などから、「世阿弥十六部集」序引だけではわからない松廬舎文庫本世阿弥伝書の書名に迫るもの。横山論文は、「世阿弥十六部集」の刊行により能が近代西洋的芸術観念に基づく文学史の中に位置づけられ、さらに大正教養主義の中で評価されるに至る過程を追ったものである。

同図録を編集した佐藤和道は、「世阿弥発見—吉田東伍と「世阿弥十六部集」—」（『観世』5月）の中でも、「世阿弥十六部集」刊行の経緯を辿り、久米邦武や重野安繹による近代歴史学の影響下、吉田東伍が実証主義的な能楽研究の道を拓いた意義を説く。また、竹本幹夫「世阿弥発見百年に思う—吉田東伍と坪内逍遙—」（『図書』77。9月）は、坪内逍遙が能の文学的研究・技法研究・演劇的研究にほぼ相当する三ヶ条を能楽研究の本領として挙げていることを確認し、そこに吉田東伍が拓いたような資料研究の視点が脱落しているとした上で、現在の能楽研究の課題として、テキスト研究の見直しと、専門化・細分化により独善的な研究に陥りやすい点の克服を指摘している。

雑誌「観世」では、特集「世阿弥伝書発見から一〇〇年」を組み、伝書に関する論文が複数掲載された。竹本幹夫による連載「申楽談儀の魅力（1—5）」（『観世』5—9月）は、「申楽談儀」の記事を少しずつ取り上げ、精読したもの。一回目（副題「定まれること」より）。5月では、立合で体を激しく動かす場面における条を取り上げ、同じ作品中で複数役者が技を競う立合専用曲は、翁猿楽での立合を別にすると、猿楽ではあまり演じられる機会が多くなかった一方、田楽では立合専用曲を演じる場合は少なかつたことなどを指摘する。二回目（副題「心根を知るとは」より）。6月）は、將軍の祇園会見物の時の思い出話を取り上げ、喜阿弥と観阿弥が曲舞に加え「余の申楽あらんには」という想定で相談して

いるのは、大王が来合させた場合が前提となっており、クリ・サシを省いてクセを謡うのは遠慮とみられることなどを読み取る。三回目（副題「能の作者（第十六条）」）。7月）では、〈鶴飼・柏崎・四位の少将（通小町）・船橋〉などの改作にふれる記事を取り上げ、演劇の世界では著作権の意識が低く、それより芸界の力関係の方が相伝権を決定したらしいこと、一度与えられれば改作翻案は自由だったであろう実態などに迫る。四回目（副題「勸進の棧敷数」より）。8月）では、勸進猿楽の棧敷席に関する記事を取り上げ、その大きさを考証する。例えば、最近は七十間余に棧敷を打つという記事では、直径三三・七七メートル余りの棧敷席となる。この七十間の場合、棧敷に囲まれた円形の中央に舞台の正先が位置したと仮定すると、橋掛かりが十三メートルで靖国神社能舞台とほぼ同寸となると推測するなど、現代の舞台との比較はイメージがわきやすい。そして五回目（副題「結崎座規」より）。9月）は、結崎座の座規のうち、特に入座料について、「貞和五年春日臨時祭祀」にみえる巫女になるための料金と比較検討し、猿楽の場合、入座料を払う代わりに翁座が参勤するあらゆる神事興行に関わる権利が保証された可能性を指摘する。「花伝」の増補に関しては、表章「世阿弥の貴人尊重説の振幅と背景—「問答条々」第一条第二節後年増補説」（『能と狂言』7。4月）がある。世阿弥伝書にみえる貴人重視の姿勢は当時の猿楽の社会的地位や職能をふまえて読むべきとの認識を示した上で、「風姿花伝」第三問答条々のうち、貴人

の来場を能の開始の基準とする際の注意について述べた部分について、「花伝」の原形が成立した応永七年以降に増補されたものであると論じる。当該箇所は、「さりながら、申樂は貴人の御出でを本とすれば」以降「されば、座敷の競ひ後れを勘へて見る事、その道に長ぜざらん人は、左右なく知るまじきなり」までの記事。貴人來場が能開始の基準となったのは、將軍御成が増えた義持時代や、響応に能が不可欠とされた義教時代を考えるべきこと、また応永七年段階の世阿弥が用いない用語や漢文式表記「不叶」が交じること、貴人早來への対策を説く論旨が「花習内拔書」より後年の論と考えられることなど、複合的な点からの周到な考察で、説得力がある。

沢野加奈「世阿弥伝書の「足踏」——その意味をめぐって」〔演劇学論集〕48。6月)は、世阿弥伝書にみられる「足踏」についての論。「花鏡」第三条「強身動有足踏、強足踏宥身動」や、「風姿花伝」第三問答条々などにみえる「足踏」は、これまで現在のスリ足に替わるような、能の基本的な歩き方と考えられてきたが、用例を検討した上で、舞やはたらきの中で拍子に合わせて足を踏む所作と解釈する。論旨は概ね首肯できるが、最後に桃源瑞仙「史記抄」で世阿弥について「起座足踏而成節」とする「足踏」も、立居振舞ではなく技芸としての足踏と解釈しているのは行き過ぎかもしれない。

切畑健「世阿弥に教わる——能装束などのこと」〔観世〕7

月)は、染織工芸史を専門とする立場から世阿弥伝書の装束に関する記事を考察したもの。「風姿花伝」第二物学条々に「袖の長き物を着て、手先をも見すべからず」とある記事に対応するように、小袖形能装束の中に袖幅を広げた例があることを紹介しており、「二曲三体人形図」を通して世阿弥時代の装束の実態を推測した論も貴重である。砕動風の図の表着は舞楽装束の袖幅のようにみえるとし、先行の芸能衣装が流用された可能性を推測していることなども興味深い。

世阿弥能楽論研究は、日本国内だけに留まらず展開してきた。玉村恭「世阿弥能楽論研究のあゆみ——その表と裏」〔観世〕6月)は、世阿弥能楽論研究の展開を概観した上で、欧米語への翻訳の歴史をたどり、特に一九四〇年代という早い時期からドイツ語への翻訳を行ったヘルマン・ポーターの事跡を紹介、戦前まで世阿弥は「セアミ」と濁らずに読まれていたが、ポーターが濁って読む専門家の説と濁らずに読む一般の読み方と両方を知っていたことなどにも言及している。また、世阿弥伝書全ての英訳を成し遂げたトム・ヘヤーの

「世阿弥の音楽伝書のキョクセツ」〔観世〕7月)は、「音曲口伝」中の、同じ字で表記する「ふし」と「きょく」の違いに言及する記事をふまえ、「きょく」には節を元にして上演する時の名人の表現力によって生み出された芸を指し、外側だけ真似ることができないものであるとし、音楽系の伝書にも個人の創造性に関わる問題が潜んでいることに注目している。(高橋)

【能楽史研究】

「国文学解釈と鑑賞」10月号では「中世芸能研究の視界」という特集が組まれ、猿楽や田楽など能楽史と関連する論考が三編収められている。高橋悠介「猿楽における荒神信仰―金春禅竹「明宿集」を中心に―」は禅竹の宿神観や秦河勝伝承を、荒神を中心とした視点から捉えようとする。禅竹が宿神と翁と荒神を密接に関連させたこと、慈悲と憤怒という荒神の二面性が翁面と鬼面の二相一如論として展開されていくこと、禅竹が住吉に参籠して感得した御影と胞衣荒神や星宿信仰が関わることを明らかにしていく。そして猿楽が荒神信仰を持つようになった背景として、猿楽が古くに担当していた地鎮・結界の呪的作法である「方堅」の影響を指摘している。田口和夫「能楽大成前の猿楽」は、観阿弥・世阿弥父子によって能楽が大成される直前の延年・猿楽・田楽について検討する。まず「徒然草」の有名な仁和寺僧の失敗談を取り上げ、罪をかぶった僧の踊りや稚児を誘い出して割子を折り出そうとしたのは猿楽を演じていたのだとする。そして寺院における延年、貞和五年の棧敷崩れ田楽、同じ年の春日若宮の巫女猿楽と祢宜田楽の番組を詳細に検討しながらそこで演じられた芸の様子を推測し、大成直前の狂言は今様を歌い舞う拍子舞を見所とした小劇、能は説話を比較的忠実に筋を追って舞台化したものだったと結論付ける。宮本圭造「田楽座の稚児と老分―田楽能の上演組織―」は田楽の組織の在り方

を考察したものの。最初に春日若宮御祭宵宮祭の田楽の立合舞が現在「もどき開口」と呼ばれているのは伝承の混乱によるものであることを明らかにし、田楽をめぐることは検討すべき点が多く残されていることを指摘する。そして田楽座は十三人の座衆で構成され、年蕨に従って一蕨・二蕨といった区別があり、それぞれ担当する役割が決められていたこと、座入り前の年少の役者も存在したこと、正式な座衆は剃髪していたことなどを紹介する。田楽の本芸である演目には正式な座衆しか出演できず、年若の役者は田楽能のみに出演したが、田楽能の配役は蕨次や年齢とは無関係に芸の力によって決められたと言う。猿楽座がスター役者中心の組織に移行して大夫が世襲となるのに対し、田楽座は組織の形態を守り続けたことが、田楽衰退の一因となったのではないかとする。

田楽に関する論考には、安田次郎「おん祭の装束給」(二能と狂言)7。4月)もある。こちらは長祿四年の装束給を福地院隆舜の書き残した田楽頭記により検討したもの。田楽頭役は田楽法師に下げ渡す装束十三人分を新調し、当日に頭屋の坊などで行われる宴会を主催する役割である。その田楽頭役を実際に監督し、装束給を間近でみた奉行の記録から、十五世紀半ばの装束給の次第が具体的にわかるとともに、最後に七番行われた「シメ猿楽」についても言及される。

「観世」には前年に引き続き宮本圭造「続・江戸時代能楽繁盛記」(1〜12月)が連載された。第十三回は後水尾院の仙洞御所などでの近臣らによる能の催しを取り上げ、風早実種

という芸達者で公家社会の能のプロデューサー的役割を果たした人物がいたことを紹介する。第十四回は撰家二条家の当主二条康道の度を越した能好きに家臣が苦勞する話。二条家は康道没後も能を愛好し、公家・役者・町人や女中衆までが寄り集まっていたの御能サークルが形成されていたという。第十五回は明和期の番組をもとに禁裏御所での地下官人による能の様子が紹介される。女帝後醍醐天皇の愛好により盛んに催しが行われたが、地下官人の不正発覚を契機に下火となった。第十六回は江戸末期の関白で閑国論争に翻弄された鷹司政通の能好きの面に光を当てる。能の催しを行うだけでなく、鼓胴を収集したり伝書を書写して新たな小書を生み出したりといった多彩な能との関わり方が示される。第十七回は江戸町人の能愛好の様子。勸進能や神事能などが盛んに催され、豪商の中には自邸に舞台を設ける者もいたが、札差の松屋のように咎められて罪科に処せられる例もあった。第十八回は姫路の播磨総社や熊本の菊池、博多の櫛田神社などの神事能を取り上げ、これらの神事能が町の人々によって受け継がれていく様子を紹介する。第十九回は黒川能の話で、庄内藩の後援もあって盛んになった黒川能が出張興行などを繰り返すようになり、芸風の変化など様々な問題が生じたという。第二十回は佐渡の能楽についてで、大久保長安の時代から様々な役者が佐渡に渡って謡などを指南し、地役人や町人によって能が盛んに行われたが、金銀山の衰退に大きな影響を受けることになったとする。第二十一回は五代將軍徳川綱吉の能楽

愛好。徳川將軍として初めて自身でも能を舞い、士分取り立てによって能役者を混乱させたことなどが記される。第二十回は綱吉同様に能楽を愛好した六代將軍徳川家宣について。気の置けぬ仲間同士の能に楽しみを見出したという綱吉とは違った側面も紹介される。第二十三回は徳川吉宗・家重・家治の能との関わり。自身は能を舞わないが息子には能を習わせるという教育方針や、観世元章の熱烈な稽古に家治が辟易した話が登場する。第二十四回は家治以降の歴代將軍と能との関わりを取り上げ、各時期における江戸城中奥での能の隆盛・衰退や指南役の変遷が述べられる。天皇・公家・將軍・町人など、江戸時代の様々な人々と能楽との関わりが紹介された連載であり、能楽がいかに多くの人に愛されたか、その様子を留める資料がいかに多彩であるかがよくわかる。

同誌では檢書店の前身にあたる山本長兵衛が最初の謡本を刊行した万治二年から三百五十年になるため、「山本長兵衛万治謡本出版から三百五十年」という特集を組んでいる。伊海孝充「謡本 ベストセラー時代の前後(上)(下)」(10・11月)は江戸初期の謡本出版事情を考察する。「上」では古活字版から整版への移行といった江戸初期の出版全体の状況を概観し、光悦謡本・元和卯月本など上流階級向けの豪華本が登場した後に寛永中本や正保耶查本など庶民向けの謡本が現れる様子を説明する。「下」では、山本長兵衛がいかなる本屋だったかを紹介し、頭注入りという他に類を見ない万治本の特色を考察する。「謡抄」を利用しながら独自の注釈をも含

み、謡本の外に長兵衛が多く出版した往来物のように、読者に一般知識を教授しようとする姿勢を指摘する。また、長兵衛が書林仲間へ提出した証文から正徳弥生本が親世元章没直後に再版手続きが取られたことを明らかにする。「謡本出版について 表章氏に聞く」(12月)は編集部「相杜久子・楡常正」によるインタビュー。江戸後期の随筆「翁草」の記事をもとに山本長兵衛が親世大夫との縁を深めていく様子を紹介し、間拍子や強吟・弱吟の区別が加えられていくといった謡本の変遷、各流謡本の出版状況などが語られる。

飯塚恵理人「徳川慶喜と謡曲(一)(二)」(「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第9巻1号・2号。2月・3月)は、千葉県松戸市の戸定歴史館所蔵の「徳川慶喜邸日誌」に基づきながら、静岡時代の慶喜と謡曲との関わりを論じる。戸定歴史館は慶喜の弟の徳川昭武が後半生を過ごした戸定邸に隣接する資料館。慶喜は明治九年から宝生流の松本金太郎を自邸に呼んで稽古を行っており、「一」では明治九年に金太郎が二百六十七日も慶喜邸を訪れたことを紹介し、「二」では明治十年・十一年の来訪状況を示す。日誌の記事の大半は「金太郎出ル」といった簡略なものだが、慶喜に限られたメソッドと謡講を楽しんだことや、慶喜の外出に金太郎が同行する様子なども窺える。

竹本幹夫「西本願寺と能」(「武蔵野大学能楽資料センター紀要」21。3月)は能楽資料センター公開講座での講演録。武蔵野大学が西本願寺派立であることによるテーマだが、前

半は東西分立以前の石山本願寺での能の様子や本願寺の経済力が戦国時代の能役者の支えとなった可能性、下間少進の活躍ぶりなどを説明している。後半では江戸時代の本願寺と能との関わりを取り上げ、諸藩の大名の能への取り組みに匹敵するものだったことが説明される。北能舞台での演能の映像も使ったわかりやすい講演だった様子が窺える。本願寺と関わる論考にはもう一つ飯塚恵理人「越前出目家墓参記」(「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第9巻1号。2月)があり、越前出目家三代源助秀満が開基と伝えられる福井県越前市の安證寺と出目家との関わりを考察する。安證寺は浄土真宗本願寺派の寺だが、源助が下間少進仲孝と密接な関係があったことをまず指摘し、安證寺の歴代住職を概観する。また安證寺の縁が江戸後期まで続いていたことを明らかにする。

俳諧・俳句と能楽との関わりを取り上げた論考も二つ。加藤定彦「露沾のサロン形成と宝生活圃―能楽の流行と江戸蕉門」(「かがみ」40。10月)は、八世宝生大夫重友の子の左太夫(活圃)を取り上げ、能楽の俳諧への影響について考察する。前半は活圃が密接な関わりを持った露沾(磐城平藩主内藤義泰の子)が父と不和になって後継ぎの地位を捨て、俳諧に没頭して独自のサロンを形成していく様子を考察する。後半では活圃の能や俳諧における活動を辿り、兄の九世宝生大夫友春が其角と交友があったことから活圃が芭蕉に入門したことなどを紹介する。芭蕉の句に謡の影響が強く見られるこ

とから芭蕉と能役者たちとの親密な交流が窺えるところし、美意識・芸境・構想など多くの面で俳諧と能楽は通うところがあり、互いに益するところが多かったからだと推測している。乙幡英剛「正岡子規編『謡曲古句』成立に関する一考察」も「一人の編者・池内信嘉をめぐって」(二松学舎大学人文論叢)82。3月)は、雑誌「能楽」に明治三十五年と三十六年の二期に分けて掲載された「謡曲古句」を取り上げる。

「謡曲古句」は子規が「俳句雑纂」から編集したものとされるが、子規が没する直前と一年後に掲載されたものだけに他者の手が加わっている可能性を想定、「謡曲古句」と「俳句雑纂」を細かく比較することで他者の関与を明らかにし、他者とは池内信嘉であり、子規が編集を池内に委ねたとする。

明治期の大阪の能楽を考察したのが天野文雄「小西新右衛門家二代の能楽愛好と近代大阪の能(その五〇七)」(「おもて」100-102)。前年に続く連載で、伊丹の酒造家であった小西新右衛門業茂・業精親子と能との関わりを紹介する。中之島翠柳館舞台や大阪博物館舞台での業茂の演能の様子や、小西新右衛門文書の有芳楼や有芳館での番組は小西邸舞台での催しである可能性、父とは異なる形での業精の能への関わりなどが紹介されており、明治の大阪能楽界の様子や小西家が能楽界で果たした役割がよくわかる。

録音資料から強吟の音階の変遷を確認しようとするのが藤田隆則「歴史史料としての口頭伝承(録音資料)——京観世の強吟——」(「芸能史研究」187。10月)である。江戸時代以降、謡

は強吟・弱吟に分化していくが、強吟の音階はあまり意識されないことが多い。強吟は音階の圧縮を経て今日に至っており、その圧縮の中間段階を京観世の録音(昭和55年発売のレコード「京観世をたずねて」)により確認することができる。今日では同じ高さとされる「下ノ中」と「下」の音が区別されていることなどが(高砂)や(盛久)などの具体例をあげて説明されている。またこうした京観世の謡が童謡や民謡と共通する部分を持つとの指摘もある。(表)

近世の能楽史研究を特集したものが二件あった。「能と狂言」7は「江戸時代と能楽」を特集し、四本の論文を載せる。神田由築「近世芸能にどう人びと——歌舞伎役者の諸相」は、能役者から万歳師となって歌舞伎を興業していた但馬国堀村の手辺座の動向を巡って、近世芸能の形態が勸進から興業へと展開する様相を追ったもの。表きよし「江戸時代の庶民と能楽」は、江戸時代の庶民と能楽の関係を、佐土原藩・福岡藩・岡山藩の町入能と、祭礼能の小倉祇園社祭礼能・忍東照宮祭礼能、勸進能の橘寺勸進能・穴八幡宮勸進能をあげて説く。次の二本は加賀藩の能楽を扱ったもので、長山直治「近世金沢における町方の能興行と出演者」は、近世金沢における観音院・寺中の神事能と、久保市乙剣宮・小橋天神の囃子の奉納を取り上げ、そこに出演した町役者達を考証して、金沢で能が盛んであった基盤を述べ、西村聡「加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組——前田家三代利常藩期を中心に」は、加越能文庫蔵の江戸藩邸における御成能・後宴能の諸記録を検証

して従来の説を補正するとともに、後宴能における子小姓躍と小姓ワキの接点などを論じ、地方能楽の資料が中央の能楽においても有効であることを述べている。「藝能史研究」186(7月)は「芸能史料としての藩政記録」を特集。この企画は芸能史研究における近世藩政史料の有効性について多面的に論じたもので、能楽関係の論考は、宮本圭造の「芸能史料としての藩政記録―藩政記録から分かること、分らないこと―」と、青柳有利子の「小鼓幸家と津軽弘前藩」の二編が載る。宮本稿は、「弘前藩庁日記」などを例に引いて、藩政史料を軸にしながら他の史料を補うことで立体的な能楽史研究を行えることや、単にその藩の芸能記録としてだけでなく、江戸文化のネットワークを知る手がかりともなることを述べている。青柳稿は、「弘前藩庁日記」の小鼓幸家の記録を抜き出して、小鼓役者の幸清五郎正氏が御用役者として藩の能をコーディネートするとともに、種々金銭や嗜好品を授受する特権的な身分であったことを解明し、正氏の甥の清九郎やその一流の業績を丹念に追ったもので、藩政記録の史料としての有効性を実証する。未刊の藩政史料はまだかなり存するが、大部なものも多く、とても個人で読み切れるものではない。兩人が用いた「弘前藩庁日記」も、科研費による共同研究の成果を用いており、こういった記録史料を対象とする場合には共同研究が有効であることがうかがえる。青柳有利子には、同じく藩政史料を扱った「南部藩の能楽―寛文から元禄まで」(『国文学研究』158。6月)と「御在府留」にみる南部藩

能楽享受史―宝暦から幕末まで」(『能と狂言』7)もある。前者は南部藩の江戸での記録である「御在府留」を精査して、先行研究が言及しなかった寛文から元禄までの南部藩における能楽受容史を検討する。幕府のお抱え役者との仲立ちを果たした中桐兵三郎という役者のことや、天和から元禄年間にわたって能役者を御歩行組の藩士として雇用する「地謡の歩行」制度、また復曲後最も早い延宝四年の(弱法師)の上演について報告する。後者は、これもまた先学の業績を補うかたちで、「御在府留」を用いて宝暦年間から幕末まで、利雄・利生・利敬・利済・利義・利剛の六代にわたっての記事を丁寧に検証したものである。各藩主の特徴の分析には教えられるところが多く、読み応えがあるが、前論文と合わせて、これが江戸時代能楽史の中でどう位置づけられるかの、巨視的な展望も欲しいところ。

資料考証から歴史研究に及ぶ論文として、伊海孝充「下里次郎大夫家昌奥書本の周辺―近世桑名能楽史の一断面」(『能と狂言』7)がある。伊海は、鴻山文庫の下里本の改訂の方法を分析し、親身愛奥書本で第一次の訂正がなされたことや詞章面の特徴を明らかにし、書写者の下里次郎大夫家昌が桑名の廻船業者であったことを追求したもの。同様な改訂状況を有する日爪忠兵衛本との関係についても言及し、日爪が松山藩の能役者であり、桑名から松山に転封となった松平家を介して両者はつながると推論する。謡本の書き入れの分析から、江戸初期の謡享受の様相を垣間見た研究で、資料分析

から歴史研究に発展した例である。

建築学の奥富利幸は、近年、能楽堂の建築史を精力的に行っているが、この年に四本の成果を発表した。「入れ子式能楽堂の萌芽に関する考察—金剛能楽堂と宝生会能楽堂を通して」(『日本建築学会計画系論文集』74—637。3月)は、現代の能楽堂では定式となっている、鞘堂となる建物の中に能舞台を作り込む入れ子式の能楽堂の萌芽について、金剛能楽堂と宝生会能楽堂を取り上げて建設経緯を詳しく考察し、当時雑誌などで活発化していた能楽堂改良の議論が繁栄していることを論じる。「山崎静太郎設計の入れ子式能楽堂から見た能楽堂改良の導入について」(『日本建築学会計画系論文集』74—639。5月)は、「能舞台研究会」と「能楽堂改良会」の中心メンバーであった山崎静太郎が建築に関わった細川家能楽堂と梅若家能楽堂の設計趣旨を検証して、当時の能楽堂改良論が山崎の入れ子式能楽堂の設計に深い影響を与えていることを考察する。「入れ子式能楽堂の普及に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』74—643。9月)は、昭和初期に建設された名古屋能楽会会館・金沢能楽堂・福岡の住吉神社能楽殿の地方都市で建設された能楽堂を取り上げ、当時の入れ子式能楽堂の建設経緯と内容を確認し、前代よりも採光形式の工夫に共通性が見られること、椅子席が普及しながらも枱席が依然残ること、建築デザインとして和風を施しながら、設計者としては伝統様式とは一線を画する意識を持っていたことを明らかにする。こゝまでは、現在では定型となってい

る、ホールの中に能舞台を建てる、入れ子式能楽堂の形成を丹念に追ったもので、教えられることが多い。欲を言えば、近代の能楽の消長とも関連させた考察が欲しかったが、それは能楽研究の側の仕事であろう。また、「近代実業家邸宅の能楽場について—三井邸。岡崎邸・碧雲荘を通じて」(『日本建築学会計画系論文集』74—644。10月)は、「三井八郎右衛門高棟・岡崎謙・野村徳七の三人の実業家が邸宅に設けた能楽場を分析し、公的な能楽場と私的な住居部分を柔軟に使い分け、施主の主導によって造営が行われ、部屋構成や見所からの庭園の景観に配慮した能楽場を造営したことを指摘し、さらに、三井邸や野村邸で外国賓客の饗応能が実施されていることから、明治政府の外国貴賓饗応芸能に能を据えるという構想が見られると、能楽の社会的性格の変化についても言及される。これら一連の論考は、この年の二月に刊行された『近代国家と能楽堂』(大学教育出版)に収録されているので、全体の評価は単行本のコーナーを参照いただきたい。

能道具の歴史的研究として、二〇〇七年に行われた国際研究集会「散楽と仮面」報告書(『演劇博物館グロバルCOE紀要 演劇映像学2007(報告集2)』3月)を取り上げた。本書は竹本幹夫「基調講演「散楽と仮面」付、パネルディスカッション問題提起」に続いて、能面に関係する報告として、大谷節子「能・狂言面データベースの課題と可能性」、宮本圭造「鬼神面の系譜」、三宅晶子「歌舞能形成における能面の役割」、江口文恵「時代別に見る能面の変遷」、天

野文雄「多武峰常行堂修正会の「翁」は摩多羅神にあらず―翁系仮面研究序説―」の五本が載せられる。一部、作品研究と重なるものもあるが、まとまった研究成果としてここで紹介する。大谷稿は、能面研究には能面のデータ・ベースを構築すべきであり、目利きの判断や「極め」に依拠せず、可能な限り文字情報を集積し、顔料成分の分析を行うなどの科学的な基礎作業の必要を説き、その上で、現在「天神」と伝えられている面に古い作例がないことから、「申楽談儀」にみえる「天神の面」は飛出面の別称であるとの読みを示されて、客観的データと文献資料をあわせた総合研究成果の一端を示す。宮本稿は鬼神面を取り上げ、猿楽の鬼神面の淵源には、追われる悪鬼をあらわす追儼系のもので、阿吽一対の方堅系のものであり、発生の淵源がどちらになるかは意見が分かれることと、その古い鬼神面は世阿弥が砕動風の鬼能を確立することによって改革され、古作の面は消えていった過程を述べる。三宅稿は、(俊寛)が直面ではなく専用面をかけることの問題提起から、(鶴飼)(蟻通)が曲中で老人であることに触れないのに尉面を使用する理由を、老体を重視する世阿弥の意図から読み解き、(俊寛)も地獄の亡者のごときイメージから痩せ男系の専用面が作られたと述べる。江口稿は、能の作者ごとに作品に用いられる能面を大別して、新たな作風が能面を生み出した可能性や、時代ごとに変化していった能面の用法と変遷を概括したもの。同氏には同じテーマを詳述した「室町後期の能と能面―能作者別に見る能面用法の変遷―」

(「能楽研究」32)があり、本誌前号の研究展望で取り上げていたので、論評はそちらに譲る。天野稿は、翁は摩多羅神と一体であるというこれまでの有力な説を、根拠となる「常行三昧堂儀式」を読み直すことで別個の存在であることを明らかにして、多武峰の翁面は摩多羅神面ではないと論ずるが、となると本人も述べるように、翁は何をあらわしているかが新たな問題として浮上しよう。シンポジウムとしてはややまとまりを欠く印象もあるが、能面を総合的に検討した成果として特筆すべきであり、大谷稿や三宅稿は能面研究が今後の作品研究に有効であることを示唆している。

能道具を扱った史的研究としても一つ。村上尚子「畳紙墨書より探る加賀藩主の能、そして富山藩の場合について―野村美術館・彦根城博物館蔵能装束より―」(「野村美術館紀要」18。3月)は、能装束を包んで保管する畳紙に記された情報から、能楽の受容を考察したもの。装束自体には製作に関することなどの情報は刻まれないから、畳紙の情報は重要な手がかりとなる。村上は、野村美術館と彦根城博物館蔵能装束に用いられた畳紙百一点もの情報から、加賀藩における江戸後期の斉広・斉泰時代の能楽について考証する。祝儀の折りに新調されたもの、万延元年に富山藩より譲られたものなどが具体的にわかるが、労作である一覧表から加賀藩の能の隆盛ぶりがうかがえた。(小林)

【作品研究】

本年度も作品研究は数が多かった。そのすべてに触れることはできなかつたことを、まずおことわりしておく。一方、「研究成果の社会への還元」が強く推奨されるようになり、一般向けの講演会や雑誌の記事などに新しい知見が織り込まれることも増えてきたように思われるので、そうしたものもいくつかとりあげている。以下、山中(前半)と中司(後半)の分担執筆である。

「国文学 解釈と鑑賞」(74—10。10月)は「中世芸能研究の視界」の特集。作品研究に関わるものとしては、岡田三津子「宴曲の文芸性と芸能性・宴曲から曲舞・謡曲へ」、伊海孝充「風流能の基底(羅生門)を例に」、西村聡「宗教劇から人間劇へ鬼を救い生を語る能の流れ」がある。岡田稿は、宴曲「領中振恋」の表現を曲舞「西国下り」がどのように取り入れつつ恋の文脈から切り離して新たな修辞を創りあげて行ったか、具体的な詞章に即して丁寧に検討する。伊海稿は「羅生門」の成立の問題や演出の特徴を論ずる。多武峰様の演出を意識した詞章制作、兜の表現、札を竹に挟んで持つ古演出等々、個々の指摘は面白いが、それをすべて「風流能」「風流性」という言葉でまとめると、かえって実体が見えにくくなってしまっているのではないか。もう一步具体的な説明がほしい。西村稿は、「通小町」(四位の少将)、「小町」(卒都婆小町)の比較・分析から始め、古作の鬼能から碎動風鬼の能への変更、犬王の

影響とその超克、美しい幽霊の創造等々、多くの新しい視点によって、「井筒」のような女体夢幻能までの道筋を付ける。具体的な詞章の分析は最小限に抑えながら、作能史を考える上でも個々の作品の意味を考える上でも重要な指摘を並べている。

ほかに、世阿弥および世阿弥時代の作品に関する論考を三本とりあげる。三宅晶子「佐渡における世阿弥」(「国文学 解釈と教材の研究」2月)は同誌の特集「流人の文学」に寄せた一篇。禅竹宛書状の文言と「金鳥書」に収められた謡の精緻な分析を通して、「自己抑制の効いた、克己心のある、精神力の強い」世阿弥の姿を浮きぼりにする。特に前半の佐渡書状の分析に教えられることが多かった。原田香織「よしあしびきの山姥—作品研究『山姥』」(「文学論藻—東洋大学文学部紀要」2月)は、「山姥」前場におけるシテとツレの関係、山姥のイメージ形成等について述べる。「紙幅の関係」で前場だけを対象としての考察なので、作品研究としてはどうしても物足りなさが残るのが残念。なお、ロイヤル・タイラー *Japanese No Dramas* (Penguin, 1990) の *The Mountain Crane* に添えられた深い作品解釈(能楽研究所発行「能(山姥)を読む—ロイヤル・タイラー訳を通して—」に日本語訳収録がシテとツレの問題や「山姥」の複合的なイメージについて)も論じており、原田稿とは別の道筋を通じて、同じく「双方向的な存在」「二重なる世界の顕現」といった指摘をしている。テキストに「善悪不二」の思想が満ちている以

上こうした見解の一致も当然かもしれないが、併せて読むと面白いので紹介しておく。

小林健二「能(大江山)と「大江山絵詞」」(国文学研究資料館紀要)35。2月は、(大江山)や(土蜘蛛)に登場する「独武者」の素性を突き止め、(大江山)の成立事情を探る論。酒吞童子物語の諸本や絵巻の本文・挿絵における鬼退治一行の人数を丁寧に調査したうえで、能(大江山)が香取本「大江山絵詞」に最も近いこと、「独武者」は頼光の家来である四天王に対して保昌の家来である独りの武者という意味でありそれは太宰少監清原致信だったこと等を明らかにし、さらに、この独武者が次第に保昌と同化していく様や、(土蜘蛛)の独武者は(大江山)を踏まえて造型されたこと等にも触れる。また落合博志「所見曲に関するいくつかの問題」(能と狂言)創刊号)の指摘(応永三十四年演能番組)に見える「酒天童子」がすなわち(大江山)で將軍義持の周辺で作られた可能性があるとの指摘)や、室町將軍が絵巻を「権威の象徴として」所持していたとの美術史研究の見解を踏まえ、「將軍家御用の親世座の能の作者」が、「室町將軍の周辺で」香取本「大江山絵詞」を「披見する機会を得て」能(大江山)が制作されたと推定する。

後出)。中司稿は、番外曲(鶏籠田)について上演記録、江戸時代の書上の記録、版本への収録状況等を押さえた後、鶏に關する詩句の引用の確認、憑依と調伏を扱う他の作品との比較を行う。どれも手堅い作業ではあるが、誰がやっても同じ結果になる基礎作業とも言える。境界を越えて進入してくる者の問題、(葵上)との共通点など、深く追求すれば面白そうな問題もすべて軽く流していく印象で、著者独自の論が展開されないのが残念。一方の式町稿は、榎並左衛門作の原(柏崎)の成立に、親鸞の曾孫で南北朝に活動した浄土真宗の僧「存覚」が関わっているのではないかという大胆な仮説を提示する。自分の信じるところを掘り下げていく熱意は中司稿に足りない長所として認めるが、やはり無理な推測だろう。いちいち指摘しないが、基本的な事項の誤認も散見し、また文意の通らない箇所もある。

次に、個々の作品ではなく能作品全体を見渡しての論を挙げる。石井倫子「能に描かれた仏教」、三浦裕子「音楽」に見る能と仏教」(ともに「武蔵野大学能楽資料センター紀要」21。3月)は、同センター公開講座「仏教と能」の講演録。石井稿は「能に登場する仏教の諸相」を、0ワキ僧の引いによる成仏・1墮地獄・2修羅の苦思・3歌舞の菩薩・4阿弥陀念仏・5各宗の教義的内容・6狂言綺語・7天狗に分類して手際よく概説した後、親阿弥・世阿弥・元雅、さらに禅竹以後の作者の能や江戸時代作の(現在七面)までとりあげ、仏教との関係を述べる。90分の講座とは思えないほどの情報

【日本文学誌要】79 (法政大学国文学会。3月)は西野春雄

法政大学名誉教授の退官記念号。教え子の論文が並ぶが、ここでは中司由起子「(鶏籠田)考」、式町眞紀子「隠頭の能(柏崎)」という対照的な二本を取り上げる(他の論文については

量。三浦稿は、世阿弥の呂律の理論と雅楽や声明の呂律との比較、能の詞章に現れる「音楽」が多くは天界の音楽を指すことなど、概説的な部分はさすがに音楽の専門家の説明で判りやすい。それに比べ法要の場面と太鼓の役割についての考察部分は、「人間の心を描いているので太鼓が入らない」「日常を超えた宗教的な場面」だから太鼓が入る、といった説明がわかりにくくすぐには納得できないが、能における太鼓は人間以外の役が登場する時と法会の場面に演奏されるという通説では説明しきれない実態を、別の形でもう一度説明しようとする試みと読め、いちばん面白くもあつた。論文の形でのより詳しい考察を望みたい。

奥山けい子「能と歌舞伎の女性表現」〔歴史評論〕708。4月)は、両芸能における女性の演じ方を、主に世阿弥伝書や「あやめぐさ」等の記事を引用して比較する。既に知られていることの解説的な内容ではあるが、女性の役に関する有名な記事を「女性らしさの表現」という視点で並べて見ることに自体に意味があると思われた。(山中)

「鏡仙」〔研究十二月往来〕には四本の作品研究の論考が掲載される。佐伯真一「景清の明暗」(581。6月)は、能と幸若舞曲の景清像の比較を通して、能(景清)の特徴を導く。(景清)は幸若舞曲「景清」の強く明るい景清と対照的であるが、両者の暗・明は交錯すると指摘する。幸若舞曲の裏側には「両眼を失って乞丐人の姿で放浪する暗い景清の姿が透けて見える」とし、能の後半で作者は盲目でみじめな姿の景清の

記憶の中から、過去の鏡引きの晴れ姿を現前させるが、シテは語りが終わると盲目の老人に戻り、娘と別れてゆく」と説明し、「最後は聴覚のみに頼って、景清は底知れぬ闇の中に沈んでゆく」と解釈する。「(明)から(暗)への転換」がポイントであり、「その明暗は、おそらく、中世の芸能と芸能者、あるいは物語とその語り手全体が内包しているものである」と結ぶ。

井上愛「ものすこし」小考(585。11月)は、金春禪竹作品(定家(芭蕉)(楊貴妃)(大原御幸)の「ものすこし」の用例が「ものすこし」風景というより、「ものすこし」場所として描かれ、より舞台が限定されている」ことや、(楊貴妃)(芭蕉)では「ものすこし」風景とシテの心象が重なり合っていることなどを指摘する。このような禪竹の「ものすこし」風景は、(殺生石)等の「異類が登場する世界を形容する「ものすさまじき」風景」を表す語として、不気味さや恐ろしさのみを強調する表現へと変奏されて用いられるようになった」と推測する。また、「鏡仙」掲載ではないが、井上稿と同じく禪竹の用語に注目した論に周重雷の二本の論文「水―色―心とのイメージの連続性」「クリ」「サシ」「クセ」に見る禪竹作の特色」(『法政大学大学院紀要』62。3月)・「幽玄から枯淡へ」(『西行桜』と芭蕉の曲題をめぐる(『法政大学大学院紀要』63。10月)がある。前者は禪竹作とされる能の曲舞部分に「水―色―心」と連続性を持つイメージがあるとした論。後者は、(『西行桜』と芭蕉)では「止観的態度、

閑寂的美意識、そして隱者的風雅」が共通する一方で、(西行桜)は「幽玄」、(芭蕉)は「枯淡」という曲趣の違いがある。と指摘。とくに(芭蕉)は、ワキの性質や詞章に引用された和歌や漢詩に閑寂的、隱者的志向があるので「隱者能」と呼べるとする。禪竹関係の作品論はこれまで数多くあるが、今後とも言葉を尽くして論を展開し、それを総括する段階にきてい

るのではないだろうか。

再び「鍊仙」掲載論考に戻り、夢幻能に関わる論を紹介する。天野文雄「源氏物の夢幻能ではなぜ物語中の人物が亡霊として登場するのか」(57。2月)は、「源氏物語」を素材とする夢幻能のシテが亡霊であることの原因が、中世における「源氏物語」の理解にあるとした論。「源氏物語」注釈書「河海抄」に見えるような、物語中の登場人物や出来事に実在人物、歴史的な事象をあてようとする準拠の姿勢が南北朝期から室町時代の「源氏物語」の理解の仕方であったと述べる。

重田みち「夢幻能」をとらえなおす(578。3月)は、「夢幻能」二場物のプロットを、後場でのシテが現れるきっかけに焦点を絞り、①ワキの夢の中に亡霊等が現れるもの(夢型)②読経によって亡霊等が現れるもの(読経型)③「念仏によって亡霊等が現れるもの(念仏型)④加持によって亡霊等が現れるもの(加持型)⑤ワキの前に神の類が実際に影向するもの(影向型)の五つのタイプに分類する。これらのタイプを比較し、「夢型」が作品数として他よりも少ないことと「夢型」以外は宗教的要素が強いことをあげ、「夢幻能」「複式夢

幻能」という呼称の弊害として、宗教的要素が強い能が能作史上では基本であり、むしろ「夢型」は例外であるにもかかわらず、それをわかりにくくしていることを指摘する。また最大の弊害を「祝言的脇能を典型とする老体の能と、修羅能などの幽霊能との差を見えにくくしてしまった点にある」と示す。さらに神が登場する「夢型」の能が極めて例外的であるとして(阿古屋松(難波)の例をあげる。また(護法(谷行)といった「護法型」の能について、これらは「影向型」の古い形式であり、「通常の祝言的脇能が「夢型」でなく「影向型」を取ることは、「護法型」との関係の深さを示唆)し、「根本的に両者が同じ型であることを示す、大きな特徴」ではないかと述べる。この重田稿は「老体の能の「複式夢幻能」化」(鍊仙)570。6月)の続稿であり、「研究展望(平成20年)」でもとりあげた。

夢幻能に関する論はほかに、今泉隆裕「幽霊能の一考察―「苦しむ死者」親の採用についての覚書」(日本文学誌要)79。3月)がある。本稿でも夢幻能の代わりに幽霊能の語が用いられている。筆者は、幽霊能に影響を与えたものとして、先行研究をあげつつ「夢幻説話」に注目する。その「夢幻説話」の淵源として、神仏習合に関連して取り上げられる「神身離脱譚」があると指摘し、夢幻能・夢幻説話・神身離脱譚は同パターンの話型であるとして、幽霊能のさらなる淵源に神身離脱譚を位置づける。神身離脱譚によって人々が祟りを克服する過程を「祟る死者」へと応用したのが幽霊

能であると考察する。さらに神身離脱譚を通して幽霊能を検討すると、「幽霊能の死者は基本的に苦患を述べても、祟ることはなく、たとえば被害者であってもその宿業を嘆き、自らに原因を求めるものが多し」とし、例として(鶴飼・藤戸・敦盛)をあげる。「苦しむ死者」が苦患の原因を自己の罪業として自覚し、自ら「懺悔する死者」となると指摘し、この死者の懺悔によって主役独演主義、筋の中心が懐旧談となるなどの、能独自の的方法が結果的に確立したと結論する。また修羅能について「省察された武將たちの内面が外在化されたものが舞台の上で繰り広げられているとさえいえる」としめくくる。このような能の根幹に関わる問題については、近年若手研究者によるものが多いとはいえない状況であるが、今後の活発な議論が期待できるのではないだろうか。夢幻能と呼ばれるものの定義・成立についての論考を紹介したが、舞の成立や意味、効果についても合わせて考えていく必要がある。

ここから「応永三十四年演能番組」を考察に用いた論文を紹介する。佐藤和道「義経に従う人々」(吉野軍)伝承の成立と能(忠信)(静)―(演劇映像学) 2008。3。3月)は、静・忠信伝承の中心である(吉野軍)譚が「平家物語」延慶本成立の十四世紀初頭以前には成立していたという形成過程を明らかにし、忠信や静を主題とする能の成立状況にせまった論。(忠信(空腹))をとりあげ、伊海孝充の論を紹介している。伊海説は、(錦戸)と(忠信(空腹))の「空腹」の詞章表現が類

似すること(「応永三十四年演能番組」掲載の「忠信」をめぐって)「中世文学」51、室町後期の能にも(錦戸)のような類型的な表現があり、(忠信(空腹))がそれを踏まえた可能性があること(「錦戸」と「清重」―腹切と英雄の能)「楽劇学」8)から、(忠信(空腹))を室町後期の作と考えるのに対して、佐藤は「簡略な忠信(空腹)の表現が古態で、後代に至るにつれて細かな描写が行われたと考える方が自然ではないだろうか」と、(錦戸)―(忠信(空腹))に疑問を呈す。また忠信の最期を描く(愛寿)をとりあげ、その特色を明らかにする。さらに「舞芸六輪」「たゞのぶ」の記事から「愛寿が従者を伴い吉野を訪れ、住僧と共に供養をすると、忠信が在りし日の姿で現われ、(吉野軍)の様を見せて消える」とその筋を想定し、「たゞのぶ」が敢えて舞台を吉野としたのは、(吉野軍)伝承の浸透が影響したものではないかと考察する。応永三十四年上演の「忠信」については、竹本幹夫の「忠信」(忠信(空腹))説(世阿弥晩年期の能と能作者)と、伊海の「忠信」(修羅能(たゞのぶ)説を紹介し、両説と同様に(愛寿)は応永の「忠信」とは無関係であること、(たゞのぶ)の形式は世阿弥時代よりも下った作風を持つ(伏木曾我)と似ており、(伏木曾我)と同時期の作と考えたいとする。(忠信(空腹))には室町後期の上演記録がなく、したがって応永の「忠信」がいずれの作品であるかを断定するのは困難であるとの立場をとる。ほかにも静の(吉野軍)譚の能として(吉野静)をとりあげ、(吉野静)が舞の場所を勝手明神とすることに注目し、

藏王堂が正平三年に焼失、康正元年まで復興されなかつた事実と照らし合わせて、〈吉野静〉はこの時期に成立した可能性をあげる。また〈吉野静〉(二人静)が現存諸記録から康正元年以前に成立した確証は得られないとする。一方で世阿弥伝書中の〈静〉や〈静が舞の能〉が、〈吉野静〉や〈二人静〉の「祖形」となる勝手明神における舞を描く能であつた可能性」を指摘する。

この佐藤稿では〈伏木曾我〉の成立を室町後期とするのに対して、比較的古い作品と考えるのが、伊海孝充「能(伏木曾我)考」——「曾我物語」との関係と応永年間の曾我物——(『日本文学誌要』79。3月)である。〈伏木曾我〉の詞章と「曾我物語」諸本の表現の対応関係についての先行研究をふまえたうえで〈伏木曾我〉の特色自体を明らかにし、「曾我物語」研究へも繋がる問題提起をした論考。〈伏木曾我〉には修羅道の苦思を見せ、弔いを願うなどの修羅能の定型から外れた要素があり、「祐成が落馬する場面の「物まね」を描出するために、修羅能の枠組み」が利用されている点に特色があるとする。その主眼となる伏木によって落馬する場面が、「曾我物語」真名本では「躑躅根」に馬が足をとられたからとし、仮名本では「伏木」に馬が乗りかけたとする違いから、〈伏木曾我〉は仮名本が流布していた状況で成立したとする。この説を補強するものとして、佑成以外の人物が伏木によって落馬する場面が「曾我物語」仮名本においてのみ二例あり、それらが真名本では他の言葉であつたり、当該箇所がないこ

とをあげる。さらに「伏木」が曾我伝承の中で定着していたとし、それを構想の中心において作能されたのが〈伏木曾我〉であると指摘する。したがって仮名本「曾我物語」の成立時期問題には〈伏木曾我〉の成立時期が関係するとして、〈伏木曾我〉の寛正六年演能記録等の現存資料をおさえつつ、筆者は「応永三十四年演能番組」の「曾我虎」の上演に目をむける。この「曾我虎」を〈虎送〉と考える通説に対し、筆者は田口和夫の論考を紹介して「曾我虎」(伏木曾我)説を提起する。その理由として〈虎送〉はコトバの詞章が少なく、フシ中心の謡物としての性格があり、現存記録も永正十三年と〈伏木曾我〉よりも五十年ほど遅れることをあげて、〈虎送〉が「応永三十四年に演じられていた曲であることを積極的に認める特徴はない」と記す。さらに〈伏木曾我〉の寛正六年の上演が音阿弥を中心とする観世座であつたことと、応永番組でも「曾我虎」を三郎(音阿弥)が演じていることから、「〈虎送〉よりも〈伏木曾我〉の方が「曾我虎」と緊密な関係にある」と推定する。資料の限られた作品の研究は困難な点多々あり、資料が存在しない状況をどのように受け取るか、立場が異なる場合もあるうが、「応永三十四年番組」を利用した研究と、その番組中の作品特定についての活発な議論を望むところである。

また佐藤・伊海には2008年の軍記・語り物研究会における研究発表要旨をまとめた、伊海孝充「能(烏帽子折)の「素材」と変遷——義経伝承の能の問題点」(『軍記と語り物』

45。3月・佐藤和道「曾我伝承に基づく能」―「曾我物語」との関係を中心に」(同)がある。これらは論文ではないが、伊海発表は論文化されておらず、佐藤発表は同氏の「舞を舞う曾我兄弟―男舞の成立と(元服曾我(小袖曾我(虎送)―」(『国文学研究』149)もとにした発表であるが、前稿とは異なる説に訂正された部分もあるので紹介することにした。伊海発表は(烏帽子折)を例に、能と軍記物語の関係を検討する際の新しい問題提起の視座を①詞章と演出の関係②作品成立、上演時の状況③隣接諸文芸の影響による改作の可能性という三つの視点から述べた論。佐藤発表は男舞の成立についての論。(盛久)が男舞物の最初であるという説に異論を提起する点が前稿と異なる。ただし(安宅)の舞から「一般的な男舞が成立した」という論等に疑問がないわけではない。前稿については「能楽研究」34号「研究展望」(平成18年)でとりあげている。

丁寧な詞章の解釈に基づいた論が、高橋毅志「感乱と歓喜と高野の奇跡―能(高野物狂)の「狂ひ」について」(『金沢大学国語国文』34。3月)である。能(高野物狂)の中で「狂ひ」がどのような効果をあげているのか明らかにしている。作品中の「狂ひ」の用例を検討し、感乱を表す方法としての「狂ひ」と歓喜といった感情を歌舞で表す「狂ひ」があり、それらが「感乱と歓喜という二極的な心理」であると指摘し、さらにシテの狂いの原因と、狂いが覚めるに至る展開を解釈する。シテの内的な狂いは「主君としての子方の存在に依り

かかって」おり、「自らの存在基盤をも脅かす事態に思い乱れていた」が、シテは高野の靈威に影響されて高野山奥・三鉢の松へ上るに従って「狂ひ」が覚めてゆく。この「狂ひ」が鎮まったのは奇跡的な僥倖であり、「物狂であるシテにとつては、それこそ最も讃歎すべき高野の靈験」であって、それゆえシテは曲舞で高野の「深く静かなることを謳う」。曲舞の高野讃歎の内容について、「深さ静けさが大きな柱となっている」として、その理由をこのようなシテの「くるひさむる」経験に求めている。また再会の原因と、主従ともに仏道修行に道に入る結末について、筆者は以下のように指摘する。再会の実現は、筋の上では高野山の靈威に導かれるように進むが、その靈力が与えた奇跡は再会の場三鉢の松を提示し、「シテの心を鎮めその力を引き出してやることまで」、再会実現の原動力は、シテの絶望的に深かった苦悩が解放され、それに由来する信仰心の高まりが結実した高野讃歎の舞にある。つまりシテの物狂の心と放下の歌舞の真価が発揮されたことが再会を決定づけたと結論し、「物狂と放下の二側面を持ったシテの「狂ひ」の研鑽は、シテの新たな門出には必要不可欠だった」と結ぶ。ていねいな解釈に基づいた論で、そのほかの物狂能についても考察を望みたい。

以下にあげる三本の論考は、題材、詞章の素材の処理についての視点が盛り込まれた論である。まず山崎福之「作品研究(国栖)詞章注釈の試み」(『観世』76。2月)は中国文学(漢籍)に注目して、あらたな詞章注釈をおこなった論。筆者が

とりあげた詞章の一つは、「葦菜の羹、鱸魚」。先行注釈では「晋書」(卷九十二)張翰伝の故事が出典とされるが、これは張翰の逸話としては最古の文献とは言えないことをまず明らかにする。唐の初期「芸文類聚」卷三「歳時上・秋」に「世説曰く」として張翰伝が掲載されており、この「世説」(「世説新語」)が「晋書」よりも早く、最初に張翰伝をまとめた文献であると指摘。ただし(国栖)作者に影響に与えたのは「白氏文集」卷六十九・偶吟であり、「白氏文集」の影響の大ききにも触れている。筆者の注釈のその二は、「それ君は船、臣は水、水よく船を浮かむとは、この忠勤の喩へなり」。先行注釈は「荀子」王制篇に拠るとするが、これは主君に対する警告であって「忠勤の喩へ」ではなく、(国栖)の文脈には合っていないと説明する。(国栖)と同じ文言の(養老)(弓八幡)の「謡抄」の記事をあげ、この文言は、日本では中世以來重要視された「貞観政要」のさまざまな注釈理解があつてこそ(国栖)等の祝言的な場面で使うことができるとする。さらにこの詞章が作品の構想にも関わるとして、「警句としての要点である「水は則ち舟を覆す」を、そのまま「臣下が君主を覆す」の意味では用いずに、舞台上の演出法として、舟の作り物を裏返し、その下に淨見原天皇(子方)を隠して追手の目を免れさせるといふ形に取りなしたのではないかと」述べる。

米田真理「観世信光の「調伏型祝言能」——(太施太子)を中心に」(「中世文学」54。6月)は先行研究をふまえてつづつ太施

太子説話と能、延年大風流と能、類似作品と(太施太子)の比較を通して、信光が作り上げたとする「調伏型祝言能」の成立を考察する。(太施太子)で帝釈天と龍女の闘争が描かれるのは(舍利)の影響であると述べ、ワキを大臣とし祝言性を主にした構成の(太施太子)は(舍利)が進化した形であると指摘する。その進化においては、祝言性を担うと同時に闘争の契機となる如意宝珠の役目が大きく、如意宝珠が介在することで「調伏の場面を見せ場に置きながら、同時に祝言能であることが可能」になると考察する。このような性格の能を「調伏型祝言能」と名付けることを提起し、信光作の幾つかがこのタイプであるか、またその応用形であると述べる。信光がこのタイプの能を作能した理由を、当時新しい題材であった中国の説話故事が、直接的な方法では能一般の形式である二場構成にはなりにくかつたからとする。(狸々・慈童・岩船)が半能形式で上演されるようになったのも、捧げ物が前・後半で重複してしまう点等に原因があり、対して「調伏型祝言能」は闘争場面を後半の見せ場とするので、二場物として成功していると指摘する。「禪風雑談」に記された鬼・龍を得意としたという信光評から、「調伏型祝言能」は祝言能の枠組みの中で、信光が得意芸を発揮するという発想から生じたのではないかと推測する。

斉藤英喜「草薙」と中世の神話世界」(「国立能楽堂」309。

5月)は題材の背景に関する論。yroチがスサノヲに奪われた草薙剣を取り返そうとヤマトタケルを妨害する場面は古代

神話に見えず、(草薙)は「平家物語」「剣の巻」を素材としながらスサノヲのヲロチ退治とヤマトタケルの東征伝承を結びつけ、水蛇神ヲロチの執念深さを際立たせたと指摘する。また「日本書紀」の中世的解釈「再創造の例」として、「平家物語」「剣の巻」や「愚管抄」の安徳天皇「ヲロチ(龍王)化身説などを紹介する。これらと同じく(草薙)も中世神話世界において、「豊かな神話的想像力と魅力的な物語創造のエネルギが渦巻いていた」結果であるとしめくくる。

丁曼「謡曲「砧」と「井筒」の中国語訳」(『演劇映像学』2008。3。3月)は、(砧・井筒)の中国語訳(申非訳)「日本謡曲狂言選」・王冬蘭訳「鎮魂詩劇」を文体・内容の解釈・出典のある詞章・語彙と表現・注釈のつけ方といった観点から比較検討した論。(砧)の「鴛鴦の衾の下には」の項が興味深い。筆者は日本語現代語訳と中国語訳の比較を通して、詞章の新しい解釈を示す。翻訳による刺激が新しい解釈や視点を生みだしている一例といえる。翻訳研究はこれまでは英語訳に関する論文が多かったが、アジアの言語による翻訳研究とそれを生かした解釈もこれからの課題になるであろう。

演出研究は二本。深澤希望「能「籠祇王」作品研究—型付の比較を中心に」(『武蔵野大学大学院人間社会文化研究』3。3月)は江戸初期〜寛政期の三種の型付を比較しながら、さらに類似点のある(春栄・盛久)もふまえて、作品の展開にしたがって演出の実態を述べる。村上湛「能「竹雪」の改訂上演」(『明星大学研究紀要』17。3月)は、著者が補綴をおこ

なった、2008年2月9日に新潟市民芸術文化会館(りゅうとびあ)能楽堂で上演の(竹雪)の詞章を掲載する。演出改訂の内容とその理由についても記す。

本年は多彩な作品論があり、そのほか管見に入ったものを以下にあげる。尾本頼彦「世阿弥の老体脇能における後ジテの老若再検」(『演劇学論集』48)は、(高砂)を中心に世阿弥伝書、作品詞章を再検討することによって、「三道」で老体とされる脇能の後ジテはすべて世阿弥作能時には老体であったとする論である。飯塚恵理人「(巴)試解—うしろめたさの執心—(一)」(『幽玄へのいざない(七)』(『紫明』24。3月)・「(巴)試解—うしろめたさの執心—(二)」(『幽玄へのいざない(八)』(『紫明』25。9月)は「平家物語」諸本における義仲の最期の場面を比較し、(巴)では平家諸本に語られる兼平の役割を巴に担わせて、義仲と巴の主従の縁の深さを強調している点などを指摘している。山本百合子「能「花籃」研究—世阿弥作物狂能としての独自性」(『福岡教育大学紀要』第五分冊58。2月)は作品の特徴を素材・構成・演出から考察し、(花籃)には世阿弥の「新しい様式を模索するときの試行性」があるとした論。小川佳世子「夢幻能における「名ノリ」について」(『京都文教大学人間学研究所 人間学研究』9。3月)は、夢幻能における「名」と名乗り方について、井筒・清経・鶴・屋島等の例をあげつつ、心理療法との関係について類似点と相違を記す。そのほか、(海人)の成立について論じた三苦佳子「能「海人」の幽霊」(『名古屋 芸能文化』19。

12月)、(大社)を中心に述べた島村眞智子「中世の出雲信仰——出雲の能の一考察——」(『総合芸術としての能』14。8月)、夢幻能の幽霊についての論に石黒吉次郎「謡曲の幽霊」(15。8月)がある。(中司)

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。狂言研究会「文久写本狂言集」(愛知県立大学附属図書館蔵、翻刻三二)(『あいち国文』3。7月)は連載の三回目。今回は(鬼の小植)から(鼻取相撲)まで。翻刻者は、熊澤美弓・近藤愛・墨功恵・野崎典子・狩野一三・久富木原玲・芝紗耶香・那須源枝・小谷成子。一回目から、鷲賢通本と酷似することを指摘しているのが、本号の翻刻でその推測がいつそう強固となったと述べている。田口和夫「天正狂言本の米沢伝来外証」(『鏡仙』576。1月)は、天正本と米沢伝来の鷲流最古本延宝忠政本との外面的比較から、天正本の出自を米沢とする説を補強する論。忠政本の表紙見返しには和歌の散らし書きがあるが、同箇所には摺り消した跡のある天正本も赤外線カメラで撮影すると大ぶりの文字が書かれていたことが確認でき、そこに和歌の散らし書きが存在した可能性を指摘する。また、末丁裏も比較し、忠政本にある花押の落書きが天正本の「正久」の花押と酷似することを指摘し、両本が緊密な関係にあったと推測する。非常に重要な指摘であるが、なぜ両本に花押の落書きがあるかなど、依然としてはっきりしない問題も残る。山本晶子「馬

瀬狂言における中央と地方」(『昭和女子大学文化史研究』12。3月)は、馬瀬神社蔵の「奥野」の署名のある狂言台本(奥野本)を中心とした研究なので、ここに含める。馬瀬狂言は和泉流の狂言が伝わったものと考えられているが、奥野本には大藏虎寛本を簡略化した曲もあることを指摘する。その上で、同本所収の(瓜盗人)の詞章を検討し、終曲部が諸流には見えない演出となっていることを明らかにし、それが仙助能の面影を伝えると推測する。馬瀬狂言に関する山本の一連の研究。地方に残る狂言に、芸の古態や仙助能のような芸態が残っている可能性はあるが、さらなる検討が必要だろう。

絵画資料研究としては、藤岡道子が二つの論考を発表している。「狂言の絵画資料の収集 その二——「洛中洛外図」に描かれた能・狂言」(『東洋哲学研究所紀要』25。12月)は前号につづき、藤岡が長年かけて収集した狂言絵画資料を整理したもの。本稿では、「洛中洛外図屏風」十種に見られる芸能を紹介している。「洛中洛外図屏風」に描かれた芸能は種類や演目が不明確なものが多いため、狂言に限定せず紹介している。最後に林原美術館蔵池田本に蜘蛛舞が描かれていることを、能や歌舞伎の幕間にこの芸能が演じられたためと結論づけている。その可能性も十分あるが、そう断定するにはもう少し根拠資料が必要ではないだろうか。「あびすびしゃもん」(『江戸初期古能狂言図』より)(『紫明』25。9月)は、国立能楽堂蔵「江戸初期古能狂言図」の一枚「あびすびしゃもん」を紹介したもの。寛永期以前の舞台風景を伺

うことができる」と指摘する。

「狂言史研究」は一本のみ。橋本朝生「大藏清虎上演年譜考」(「能楽研究」33。3月)は、虎明の弟で、分家の八右衛門家を樹立した大藏清虎の事績を追った論。生年・活躍期・没年にわけて、清虎の活動を追い、全五六七回の上演記録一覽を付す。先行研究で、虎明と清虎が不仲であったと推測されるが多かったが、清虎の活動を詳細に調査した結果、分家として宗家を支える存在と、清虎像を捉え直している。

伝書研究としては、「わらんべ草」の抄の分析と世阿弥伝書との比較を中心に、虎明が考えた「心」の重要性を分析しようとする原田香織「千手千眼の理——「わらんべ草」における狂言論——」(「東洋学研究」46。3月)がある。まず「業」を修めてから「心」の問題に移行するが、その「心」にとらわれすぎではならず、自由自在な理想的な境地を「千手千眼の理」と位置づける。また世阿弥伝書における「心」の重要性を踏まえ、虎明が芸としての「心」の用い方として習道過程において自覚的に習得することを重要視していたと考える。

虎明の「心」の概念が拡散しており、把握しにくいことは同意できるが、その多義的な「心」を原田自身がどのように把握したかがわかりにくかった。

この年は、狂言に関わる大きなシンポジウムが二つ開催された。「楽劇学」(16。3月)は、「第十六回大会 奏演とシンポジウム(「まい」とおどり——狂言と日本舞踊——)」の記録として、四本の論考を掲載する。古井戸秀夫「歌舞伎・日本舞踊と狂

言の舞踊」は、「歌舞伎の歴史から見た視点」として、三味線導入以前の第一期、三味線導入後の第二期、直接能・狂言を取り入れることが出来るようになる明治時代以降の第三期と歌舞伎の歴史を区切り、狂言との影響関係を概説する。第一期は歌舞伎が狂言小舞と取り入れただけでなく、能・狂言にも影響を与えた期間、第二期は江戸と京阪で能・狂言との関わりに大きな差異が生じる期間、第三期は京阪の伝統を踏まえ松羽目物として江戸の歌舞伎にも直接的に能・狂言が摂取される期間と説明する。配川美加「能・狂言と歌舞伎の音楽」は、狂言を取り入れた三味線音楽の分析で、主に長唄に注目する。「暁」「七つ子」などを分析し、松羽目物の音楽では、「狂言地」をちりばめ狂言らしさを表現していることなどを譜面の分析から導き出す。そのほか、狂言役者の修行過程や小舞「七つ子」の型について解説した野村萬「狂言の芸態」、日本舞踊の狂言取物の演技について概説した丸茂美穂子「日本舞踊(狂言取物)の芸態」という二本の「奏演の話」を収める。

「東アジア研究」(7。3月)には、「二〇〇八山口大学東アジア国際学術フォーラム「東アジア伝統芸能の世界」」の報告や関係論考が載る。根ヶ山徹「嗚呼の猿楽から狂言へ——散楽の受容と展開」は、中国芸能と猿楽との影響関係を概説的に整理したもの。大陸の鬼やらいである「打野胡」で「邪呼」と声をあげる「野胡」と、能楽の源流の一つである追儺における「嗚呼人」の「乱声」との類似性を先行研究から確

認し、猿楽が中国から移入されたことを再論する。また(附子)の原話を、隋代の「啓顔録」に求め、直接的な影響関係は認められないものの、「何らかの影響を受けた」と推測する。阿部泰記「狂言と唸歌における英雄伝説の表現」は、日本における為朝説話、台湾における哪吒説話という二つの英雄譚の展開を追う。為朝説話は次第に為朝自身への関心が薄れ、話柄のみが展開し、狂言(首引)のような笑いを生むことに主眼がおかれた物語に変容したと考える。哪吒説話は、仏教經典の物語から説唱文芸に影響を与える物語へと変わり、児童向けの絵本にふさわしい物語へと展開すると概説する。両者は日本と台湾の英雄物語の一例として対比されており、直接的・間接的交渉を想定しているわけではない。また同誌には、台湾の「唸歌」と韓国の「パンソリ」という芸能の論考も載る。なお、同フォーラムの報告は「山口大学文学会志」六〇号(二〇一〇年)にも掲載されているが、それらは次号以降に扱う予定。

次に作品の個別的研究。橋本朝生「狂言の当代性」(唐相撲)を読み解く(「国文学 解釈と鑑賞」74—10。10月)は、狂言を「中世史劇」として捉える視点から、以下の二点を中心に(唐相撲)を読み直す。一つは皇帝が相撲をとる前に身につける「薦」で、中世にはこれに神聖なものを卑俗なものとの接触から守る役割があったとし、その理解の上に本曲が立脚していると考える。二つ目は日本の相撲取りが中国の相撲取りに勝つという趣向で、能(唐船)の影響下にある(茶子味

梅)との類似点から、本曲の皇帝を明帝とし、中世から近世初期における権力者の対中華意識が民衆レベルまで表れたものと推測する。この二つの指摘と成立時期の推測については異論ないが、中国に対する権力者の意識と「民衆」の意識がバラレルであったかは、改めて考えてみたいところである。稲田秀雄「狂言仏師物考」(「仏師」「六地藏」「金津」)「山口県立大学学術情報」2。3月)は、すっぱが「仏師」の名を語り、買い手をだまそうとするが失敗する「仏師物」を、中近世における仏像観に照らして読みとく。「仏師」「六地藏」における人が仏像になりすますという突飛な発想は、鎌倉時代以降、生身の人間にちかい写実性をもつ仏像「裸形着装像」が信仰の対象になっていたことを踏まえていると考える。また、地藏が話すことを奇瑞として語る「金津」は、先行研究で指摘されていたように地藏に関する風習を反映しているだけでなく、生身仏のイメージが地藏信仰と舞台演出との媒介となった可能性があると推測する。橋本稿同様に、中世社会史研究の成果を踏まえた説得力のある考察である。坂井孝一「形成期の狂言に関する一考察」(「看聞日記」「公家人疲勞事」記事の再検討)「看聞日記と中世文化」。3月)は、「看聞日記」の記事全体から、「公家人疲勞事」が演じられた前後の事情を考察するもの。「公家人疲勞事」上演の背景には、盗犯事件を発端に、所職の私物化など傍若無人な振る舞いをしていた三木善理の対応をめぐる畠山と貞成との対立があったとし、その対立の矢面に立ち、当日猿楽上演

にも臨席していた公卿・田向経良が擲論の直接的な対象であったと考える。従来、「公家人疲勞事」の解釈には、この擲論を当時の狂言の特質と見る立場と、あくまでも付属的な芸と見る立場があったが、坂井稿は後者を補強するだけでなく、この擲論があくまでも一回的な芸だったと考える点が新しい。

演出面の研究には、拍子不合の狂言小歌の拍節について考察した、高桑いづみ「狂言小歌の拍節」(『鏡仙』582、7月)がある。現在の研究では狂言小歌は狂言ノリと拍子不合に分かれると考えられているが、拍子不合も本来は八割譜に収まる謡であり、役者が工夫を加え自在に謡うことよって、拍子不合へと変遷していったと推測する。

この年は、狂言のことに関する研究が多かった。まず、国語学・言語学の見地からの研究。金澤裕之「虎明本狂言集に見る「テ+補助動詞」による授受表現の成立過程」(『国語国文』78—1、1月)は、虎明本を素材に「テ+授受表現補助動詞」の成立過程を具体的に検証する論。同じ授受表現でも、「てくれる」「てくださる」は「テ+補助動詞」の用法がかなり進行しているのに対して、「てやる」「てもらう」は成長段階であると考察し、「てくれる・てくださる」系列と会話の中で対応する表現として、「てやる」「てもらう」の形式が成立したと推測する。神永正史「中世末期以降のテアル構文—狂言台本虎明本を主資料にして—」(『日本語と日本文学』49、8月)は、「てある」(テアル構文)の中世末期のア

スペクト形式の変遷と特徴を考察した論。主語が有生物の場合、主語の状態を表すものはテイル構文に移行し、動作パーフェクト用法や動作の継続を表す用法も衰退し、主語・目的語が無生物の場合、たんなる状態を表す用法は衰退したが、主体・対象変化動詞(並ぶ)などの用法は存続した、と考察する。岡戸ちはる「大藏虎明本狂言の漢語について—登場人物の発話を中心に—」(『日本文学』105、3月)は、虎明本の「漢語」の使用頻度の調査をもとに、「漢語」が中世の口語表現にどれくらい反映されているか考察する。「漢語」の品詞分類については、「源氏物語」や「海道記」に比して作用言(動詞)や形状言(形容詞・形容動詞)が多用されるようになること、使用する人物については、鎌倉時代の文書と比べて身分や性によって日常レベルでは漢語語彙に量的差異がないことなどを指摘する。労多き調査で参考になる情報も含まれるが、分析については、何を「漢語」と考えるか、語源的には「漢語」であっても近世まで下って日常に浸透した言葉を「漢語」として区別することに意味があるか、全体的な使用数値だけでなく、一語一語の個性性を考慮する必要はないかなど、疑問がある。

次にことばの解釈に関わる研究。柳田征司「「きわだやたのみなるらん」—狂言のことば一片—」(『愛媛国文と教育』2月)は、曲直瀬道三の医学書の記述と、虎明本と虎寛本の比較による本文の読み直しにより、(雷)の「きわだ」の解釈を試みる。業師がきわだを持っていたのは、調剤の必要が

なく、比較的容易に入手でき、さらに薬として即効性があったためと考え、「薬もたまぬやせぐすし、きわだやたのみなるらん」の詞章を、薬などをまったく持たない薬師が、行く先々で山野に自生するきわだを頼みにしていたと解釈する。

「きわだ」をめぐる解釈は面白く読んだが、虎明本と虎寛本との比較による作品解釈の箇所は、異論があるところだろう。

内山弘「天正狂言本抜書・その三」「たからかひ」「わか
な」「あをのり」——は、天正本の言葉の解釈をめぐる研究の続編。「たからかひ」の結末の「しうおつく」は、「主押し付く」の音便と考え、天正本の結末は主人が太郎冠者を馬乗りになつて押さえつけるかたちであつたと考える。「わか
な」の前半部の歌謡のなかに、「尾花の霜夜は……」と秋の歌が含まれていることについて、「閑吟集」の謡から「夢はし
さまし給ふな」を入れ改変することで、男女二人がいる状況に変質させ、能(紅葉狩)を意識させていると考える。「あを
のり」は、前稿(その二)で示した「ちんかく」を「しうく」の誤写と考える説に対して出された反論に対する反論。新たに出された中世から近世にかけて一般的に用いられていた「賃搔掛く」説に対して、それでは会話が成立しないと否定する。「ちんかく」の解釈に関する議論は、文意がとおるか否かが大きな焦点になるが、「あをのり」全体の読み直しや、天正本の記述姿勢について考え、改めてこの議論を見直してみたい。

林和利「狂言における関西訛せりふ考」(名古屋女子大学

紀要) 55。3月)は、狂言の言葉の発音と作品の趣向との関わりを考察するもの。(末広がり)における「絵」と「柄」、(鐘の音)における「値」と「音」が、「関西方言」で明確な発音の違いがあるとし、本来この取り違えの趣向は、発音の違いをしつかり認識している観客を想定した「関西」での上演が念頭に置かれていたと考え、(末広がり)の太郎冠者は、「関西方言使用圏外」の者と推測する。最後に「関西訛」の言葉の一覧を付す。本来、狂言が上方の言葉を主体とすることは広く知られているところだが、「関西訛」という言葉の発音が曲の趣向と密接な関わりがあるという指摘は新しい。しかし、室町時代後期から近世初期において、「絵」と「柄」(もしくは「え」と「え」)に観客が認識できるほどの差異があつたかは、現在の役者の談話などを根拠に論じることが難しいだろう。林自身も「試論」と位置づけているので、今後の研究を俟ちたい。

新しい見地からの研究が多かつたことも、この年の特徴である。まず、外国人が関わる研究から。ウィリアム・ベトルシャック・飯塚恵理人「オーストラリア留学生向け狂言教材の開発——「桌山伏」を中心に——」(民俗と風俗) 19。3月)は、狂言に対して文化的・年代的ギャップがあるオーストラリア留学生が狂言を理解するためには、直接体験型の学習が有効だとし、実演の体験とグループディスカッションを交えた具体的な授業の方法を提案する。(桌山伏)英訳付。古典芸能の有効な普及方法・教育方法については、今後ますます大

切な問題となってくるだろう。ヒープル・オンジェイ「国際化する狂言―狂言翻訳初期の英語狂言集を巡って―」(『フイロカリア』26。3月)は、二〇世紀前半に刊行された英訳狂言集を分析したもの。狂言の演劇的側面にも注意を払い、読者に舞台の臨場感を伝えようとしたヨネ・ノグチ訳『Tan Kigogen English』(一九〇七年刊)、ノグチ役の方法を踏襲しながらも、擬声語・擬態語を訳すなど研究色も濃いサドラー役『Japanese plays』(一九三四年刊)、狂言の歴史的価値を強調するが、翻訳方法に特に新手法が見られない坂西志保訳『The Ink-Smeared Lady』(一九三八年刊)の三冊を比較し、サドラー訳を「狂言らしさのない西洋喜劇」と批判する坂西へ反論する。その一方で、坂西訳に付された歴史的説明の影響力を評価するなど、英訳を享受する対象にも注意した考察は、今後翻訳を行なう上でも有益である。

次に、いわゆる理系分野の研究を援用した狂言研究。成田友紀・森田ゆい・植田一博・森田寿郎「身体動作と練習課題に着目した狂言小舞の習得過程分析」(『比較舞踊研究』14・15―1。3月)は、山本家の練習曲である狂言小舞二二曲を分析し、技芸習得の過程の特徴を考察した論。謡のテンポとハコビの移動軌跡・上肢・下肢ならびに扇の動きをデータ化し、結果、基礎段階・発展段階・応用段階の三段階に分かれるとし、基礎から発展へ移行する段階でテンポが速くなり、移動奇跡が複雑化するが、応用段階は表現を追求する要素が強くなると位置づける。まとめに協力者である山本東次郎の

見解と今回の調査結果が、必ずしも一致していないと一行だけ書かれているが、能楽研究者がもつとも知りたい情報はこの部分だろう。せつかくの文理融合研究なのだから、文系側の読者も想定してはしかなかった。河村辰也・綾井環・野島伸仁・勝又祥子・小坂敏文・吉野純一・市村洋『Motion Capture 3Dモデルを用いた狂言所作の振り帳変換方式について』(『電子情報通信学会総合大会講演論文集』180。3月)、河村辰也・綾井環・野島伸仁・勝又祥子・吉野純一・市村洋『Motion Capture 狂言所作3Dモデルの振り帳への変換方式について』(『全国大会講演論文集』4―725・726。3月)は、日本舞踊叶流の「振り帳」を参考に、Motion Captureの組み合わせによって狂言の所作を自動的に電子振り帳へ変換する方法を提案する研究。同誌に掲載されている塩澤隆允・河村辰也・神山健太・綾井環・野島伸仁・吉野純一・市村洋「狂言謡の一人稽古を支援するシステムの開発」は、前掲研究の謡部分の開発に関わる研究らしい。IT技術を用いて狂言謡を一人で稽古できるシステムとして、画面に謡本、狂言振り帳、謡の節を譜面化したもの、謡記号の解説が同時に表示されるシステムを提案する。こうした研究が、実際のようには活用されたか、活用できるか、さらに報告を俟ちたい。

(伊海)

【外国語による能楽研究】

この年に刊行された能楽研究の単行本はない。刊行論文に

においては、能そのものを中心に据える研究よりむしろ、能の技法を西洋劇の演出にいかにも用いることができるかという比較演劇学的論考が多く見られた年であった。

Fujinura Osamu, Honda Kiyoshi, Kawahara Hideki, Komparu Yasuyuki, Morise Masamori, J. C. Williams, "Noh Voice Quality: *Logopedics Phoniatrics Vocology* 34:4 (2009), pp. 157-170. (藤村靖、本多清志、河原英紀、金春康之、森勢将雅、J・C・ウィリアムズ「能の声の特質」)

能謡の音声学的分析。ここで展開されている高度に専門的な音声学的実験データと分析を迫っていくだけの素養は筆者にはないが、分析の結果導き出された結論によれば、能謡の特質をもたらす大きな要因の一つは、声帯振動と声道共鳴の間にみられる高い相互作用であるとの事である。

Ivan R.V.Rumánek, "Noh as Musical Performance with Regard to Historical Development." *Asian and African Studies* 18:1 (2009), pp. 51-79. (イヴァン・R・V・ルマネク「歴史的発展からみた音楽演奏としての能」)

中国および日本における音律理論の展開を詳述した上で、音律面からみた能謡の歴史的な変遷を概観する。さらに「塵芥抄」が書かれた頃と現代の謡を比べ、現代の方がクリ音と上ウキの間隔が狭いが、それを抜かせば「音階」は変わらないという結論に至る。

Okamura Minako, "Beckett, Yeats, and Noh: ...but the clouds... as Theatre of Evocation." *Samuel Beckett Today/Annuaire: An Annual Bilingual Review/Revue Annuelle Bilingue* (SRT) 21 (2009), pp. 165-177. (岡室美奈子「ベケット、イェイツ、能：喚起の演劇と」の「…雲のように…」）ベケット作品、とりわけ1976年にベケットがテレビ放映シナリオとして著した「…雲のように…」をとりあげ、そこに見られる夢幻能の影響、および夢幻能を降霊術的なものと捉えるイェイツ作品からの影響を分析する。

Kawai Shoichiro, "More Japanized, Casual and Transgender Shakespeare." *Shakespeare Survey* 62 (2009), pp. 261-272. (河合祥一郎「より日本化し、カジュアルで、性差を越えたシェイクスピア」)

日本における現代のシェイクスピア上演熱とその多様なあり方を紹介している。その一つが「間違いの狂言」(高橋康成脚本)をはじめとするシェイクスピア戯曲の狂言化である。本論文では、「リチャード三世」を河合自身が翻案した「国盗人」を例に、狂言の手法(演技スタイルや面の使用など)を効果的に演出に盛り込む工夫が詳述されている。また能に想を得たシェイクスピア演出の成功例として、栗田芳宏演出の「りゅうとびあ能楽堂シェイクスピアシリーズ」が紹介されている。

Yong Li Lan. "After Translation." *Shakespeare Survey* 62 (2009), pp. 283-295. (マン リーラン「翻訳の後」)

アジア(日本とシンガポール)における伝統演劇の手法を生かしたシェークスピア戯曲の演出・翻案、およびそれらの作品が英語圏で紹介・上演される際に付随する「字幕」の問題を取り上げ、演劇における言語と身体の関係を考察する。分析のために取り上げられる四点の作品中三点が、能の手法を演出の核に据えるものであった。すなわち、2007年の栗田芳宏演出「ハムレット」(リユーとびあ能楽堂シェークスピアシリーズ)、2005年の宮城聡演出「ク・ナウカで夢幻能な「オセロOTHELLO」(平川祐弘謡曲台本)、1999年のオン・ケンセン演出「リア王」である。

Suzuki Masae. "Shakespeare, Noh, Kyogen, and Okinawa Shibai." In *Shakespeare in Hollywood, Asia, and Cyberspace*, ed. Alexander C. Y. Huang and Charles S. Ross, pp. 152-165. West Lafayette: Purdue UP, 2009. (鈴木雅恵「シェークスピア、能、狂言、沖繩芝居」)

能、狂言、沖繩芝居それぞれにおけるシェークスピア戯曲の翻案作品を概観する。2002年の新作能「マクベス」(泉紀子脚本・詞章、辰巳満次郎節付・演出)、および関根勝の「Theatre Project Si」による狂言とオペラを融合したシェークスピア翻案劇が、とりわけ詳しく紹介されている。

Paul Allain, Frances Barbe. "On the shoulders of tradition from East and West: a conversation between Paul Allain and Frances Barbe." *Studies in Theatre and Performance* 29:2 (2009), pp. 149-159. (ポール・アラン、フランシス・バーブ「西洋と東洋の伝統の肩の上で: ポール・アランとフランシス・バーブの対談」)

演劇学研究者であるアランと、鈴木忠志の演劇メソッドや「舞踏」を取り入れるパフォーマーであるバーブによる対談。ケント大学の演劇クラスで両者がコラボレーションした経験に基づき、英語圏の大学演劇クラスに東洋の演劇メソッドを体験的に紹介する際の問題点、注意点、学生に対する効果等を考察している。能というよりむしろ鈴木忠志メソッドについて語ることが多いが、能の実技を演劇クラスで紹介する際の参考にもなるだろう。

Robin Armstrong. "Resource Sharing for General Music: How to Teach a Diverse and Multicultural Curriculum without Spending Extra Hours Reinventing the Wheel." *College Music Symposium* 49/50 (2009/2010), pp. 105-115. (ロビン・アームストロング「音楽クラスのための資料共有: 無駄に時間を費やさずに多様な文化的授業を作り上げるには」)

教養科目としての音楽の授業の為に、多文化の——もっぱら非西洋の——音楽資料素材を効率よく入手するためのヒント集。この目的に適した市販のCD付書籍やビデオ、イン

ターネットサイト等がコメントと共に紹介され、これらの素材を授業内コンテンツや毎週の課題、発表課題等に取り込む際の注意点やアドバイスが実体験をもとにまとめられている。英語による説明つきの能・狂言のビデオクリップを見ることが出来るサイトとして、国立劇場のサイトが紹介されている。

(竹内)